

出雲市  
埋蔵文化財発掘調査報告書  
第17集

上島古墳出土遺物  
日御崎神社境内遺跡  
鷲隧道

2007年3月

出雲市教育委員会

出雲市  
埋蔵文化財発掘調査報告書

第17集

上島古墳出土遺物  
日御崎神社境内遺跡  
驚 隧 道

2007年3月

出雲市教育委員会

## 序

今回の報告の中心となる上島古墳出土遺物については、出土品の一部が3月10日にオープンした県立古代出雲歴史博物館に展示されることを機に、現存する資料の再整理を行いました。古墳が発見されて以来、60年が経過しようとしておりますが、今回の調査によって新たな知見を提供することができました。

また、日御碕神社境内遺跡については、遺物の出土は知られていたものの、今回の調査で従来考えられていたよりも広範囲に遺跡が広がることが確認されました。驚隧道は、昭和初期におけるこの地域の隧道の様子を伝える貴重な資料です。

本書が多少なりとも地域の埋蔵文化財に対する住民の皆様の理解と学習の助けとなれば幸いに存じます。

なお、調査を行うにあたり、地元の方々や関係各方面からご支援、ご協力をいただきましたことに対し、心から厚くお礼申し上げます。

平成19年3月

出雲市教育委員会

教育長 黒目 俊策

## 例　　言

1. 本書は、平成18年(2006)度に出雲市教育委員会が実施した上島古墳・日御碕神社境内遺跡・鷺隧道の調査報告である。

2. 調査は下記の期間において実施した。

### ○上島古墳(出土遺物報告)

・調査期間：平成18年(2006) 8月21日～平成19年(2007) 3月5日

・調査体制：調査主体 出雲市教育委員会

　　事務局 石飛幸治(出雲市役所文化観光部文化財課課長)

　　花谷 浩( 同 学芸調整官)

　　川上 稔( 同 主査)

　　調査員 花谷 浩

### ○日御碕神社境内遺跡(試掘調査・工事立会報告)

・調査地：出雲市大社町日御碕字宮南457-7 ほか

・調査期間：平成18年(2006) 11月13日～平成19年(2007) 1月5日

・調査体制：調査指導 高村功一(財団法人文化財建造物保存技術協会副支部長)

　　調査主体 出雲市教育委員会

　　事務局 石飛幸治(出雲市役所文化観光部文化財課課長)

　　花谷 浩( 同 学芸調整官)

　　川上 稔( 同 主査)

　　調査員 花谷 浩

　　遠藤正樹( 同 主事)

### ○鷺隧道(事前踏査報告)

・調査地：出雲市大社町鷺浦

・調査期間：平成18年(2006) 6月12日

・調査体制：調査主体 出雲市教育委員会

　　事務局 石飛幸治(出雲市役所文化観光部文化財課課長)

　　花谷 浩( 同 学芸調整官)

　　川上 稔( 同 主査)

　　調査員 遠藤正樹( 同 主事)

3. 本書で使用した挿図の方位は真北を示す。

4. 本書の執筆は上島古墳出土遺物を花谷が、日御碕神社境内遺跡・鷺隧道を遠藤が行い、編集は花谷と遠藤が協議して行った。

5. 本報告書掲載の遺物及び実測図、写真は出雲市教育委員会で保管している。

## 目 次

I. 上島古墳出土遺物の再調査報告 (花谷 浩) .....	1
1. はじめに	
2. 家形石棺出土遺物	
3. 壇穴式石室出土遺物	
4. 墳丘出土遺物	
5. まとめ	
II. 日御碕神社境内遺跡の調査 (遠藤正樹) .....	33
1. 日御碕神社について	
2. 調査の経緯	
3. 調査の概要	
4. 出土遺物	
5. 考察	
III. 鶩隧道の調査 (遠藤正樹) .....	41
1. 周辺の歴史と環境	
2. 調査の経緯	
3. 調査の概要	

図版

## 挿 図 目 次

第1図 上島古墳の位置	第15図 墳丘出土遺物 ②
第2図 遺物出土状況図	第16図 墳丘出土遺物 ③
第3図 家形石棺出土遺物 ①	第17図 日御碕神社境内遺跡平面図
第4図 家形石棺出土遺物 ②	第18図 石造鳥居立面図
第5図 壇穴式石室出土遺物 ①	第19図 石造鳥居平面図
第6図 壇穴式石室出土遺物 ②	第20図 日御碕神社境内遺跡土層柱状図
第7図 壇穴式石室出土遺物 ③	第21図 F地点検出礎石実測図
第8図 壇穴式石室出土遺物 ④	第22図 日御碕神社境内遺跡出土遺物 1
第9図 壇穴式石室出土遺物 ⑤	第23図 日御碕神社境内遺跡出土遺物 2
第10図 壇穴式石室出土遺物 ⑥	第24図 鶩隧道周辺図 1
第11図 壇穴式石室出土遺物 ⑦	第25図 鶩隧道周辺図 2
第12図 壇穴式石室出土遺物 ⑧	第26図 鶩隧道実測図
第13図 壇穴式石室出土遺物 ⑨	
第14図 墳丘出土遺物 ①	

# 本 文

# I. 上島古墳出土遺物の再調査報告

## 1. はじめに

出雲平野の北には、「北山」と呼びならわされる山塊がある。『出雲國風土記』に、「支豆支御崎」あるいは「出雲御崎山」と記され、新羅から引き寄せられたとの伝承をもつ土地である。その西端には出雲大社や日御碕神社があり、東の端は奈良時代に「多夫志烽」が置かれた旅伏山(標高462m)である。旅伏山の南および東の山麓には多数の古墳が築かれた。その一つに上島古墳(島根県出雲市国富町2024番ノ9ほか(旧平田市国富町大字上島字丹堀))がある。

この古墳は、1949年(昭和24)5月5日、開墾中に発見された。池田満雄氏からの一報でことを知った山本清先生が、美多実氏らとともに現地調査をされ、遺跡と出土遺物を記録された(山本1995)。直径約15mの円墳とされ<sup>1)</sup>、直葬の家形石棺と竪穴式石室が並んでいた(図版1-1)。家形石棺からは、人骨と装身具類、鈴鏡、大刀と飾金具、須恵器などが、竪穴式石室からは、鐵鎌や馬具などが出土した。これらの調査成果は池田氏によって報告されている(池田1954、以下「池田報告」)。

出雲地方(島根県東部)唯一の横口のない削抜式家形石棺や、豊富な副葬品の内容などから、この上島古墳は国史跡に指定された(1957年(昭和32)7月27日官報告示)。遺跡地は1972年(昭和47)に環境整備工事がなされ、見学の便が図られた。その後、旧平田市教育委員会では、出土品を市指定文化財とし(1989年(平成元)3月27日付)、保全に万全を期した。

1990年代には、上島古墳出土遺物の研究が進展する。1993年には原喜久子氏が出土鐵鎌を扱い、これを棘籠被長頭鎌とみめた(原1993)。1997年、馬具について宮代栄一氏が報告した(宮代1997、以下「宮代報告」)。これには、その前年におこなわれた八雲立つ風土記の丘資料館特別展の成果(大谷1996)も盛り込まれている。1999年には墳丘の測量がおこなわれた。

上島古墳の出土品は、遺跡地元の「上島古墳奉賛会」が保有され、近年は八雲立つ風土記の丘資料館で保管されてきたが、今般、そのリニューアルにともない出雲市文化財課へうつされた。出土品の一部が県立古代出雲歴史博物館に展示されることを機に、現存する資料の再整理をおこなった。本稿ではそれに加え、大社考古館や島根大学考古学研究室所蔵資料をあわせて報告する。発見当時の状況については、島根県埋蔵文化財センター所蔵の山本清先生考古資料(以下、「山本資料」<sup>2)</sup>)とアタゴ写真館所蔵写真を参考にさせていただいた。



第1図 上島古墳の位置

## 2. 家形石棺出土遺物

### (1) 出土状況

家形石棺の状況は「池田報告」(2~3頁)にある(第2図)が、これとは別に、発見直後に撮影された写真が存在する<sup>3)</sup>。これによると、人骨の保存状況はかなりよい。頭骨は完存し歯列も明瞭にみえる。脊椎骨は直線的に並んで肋骨も残っていた(図版1-2)。左上腕骨も元の位置にあり、それと脊椎骨の間、肩甲骨(外側縁と下角がみえる)の近くに大型刀子がみえる。頭部の毛髪はかなりの量が残っており、額にもS字状の毛髪塊が見える<sup>4)</sup>。「池田報告」に、脊椎骨が「かなりひどく第二次的に移動している」とあるのは、その後に動かされた状態(図版1-3)をさすのだろう。

大刀の金銅製飾金具は、柄の上に3点が、残る3点は柄の脇側に大刀と平行に並ぶ(図版1-3)。金具はすべて半球部が上に向いた状態(表向き)だ。つまり、柄に着装された革帶(護拳帯)は2条あり、3個ずつの飾金具があったと考えてよい。ただし、現存品のどれが組み合うかは、わからない。

### (2) 家形石棺出土遺物

家形石棺から出土した装身具類と副葬品のうち、五鈴鏡、鈴釧、玉類は現存しない。

A 五鈴鏡 1面	B 銀環 1個	C 鈴釧 1個
D 玉類 184個(瑪瑙管玉10個、ガラス丸玉22個、ガラス小玉152個)		
E 鹿角形刀子 4本	F 大刀 1振	G 護拳帯飾金具 6個
H 毛抜形鉄器 1個	J 針状鉄器 3本以上	K 須恵器蓋杯 3組
M 人骨 1体分		

#### A 五鈴鏡(第3図1)<sup>5)</sup>

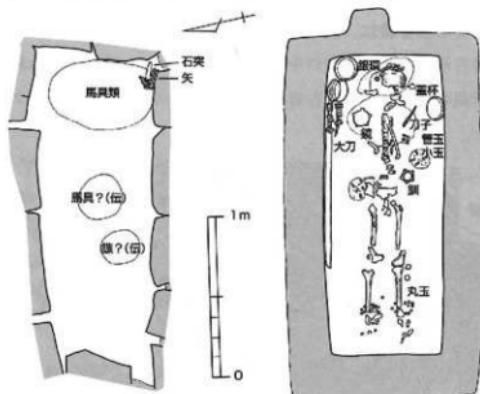
「池田報告」に面径3寸(9.1cm)。鏡は音を発し、鏡背には鉢に通してあった紐が錆びついていた。

「山本資料」拓影や写真によると、径4cmの内区は外周に配置された半環形紋様で四分される。内区には周環のある乳紋が四方にあり(3個確認できる)、それより小さい乳紋がその周りに散る。

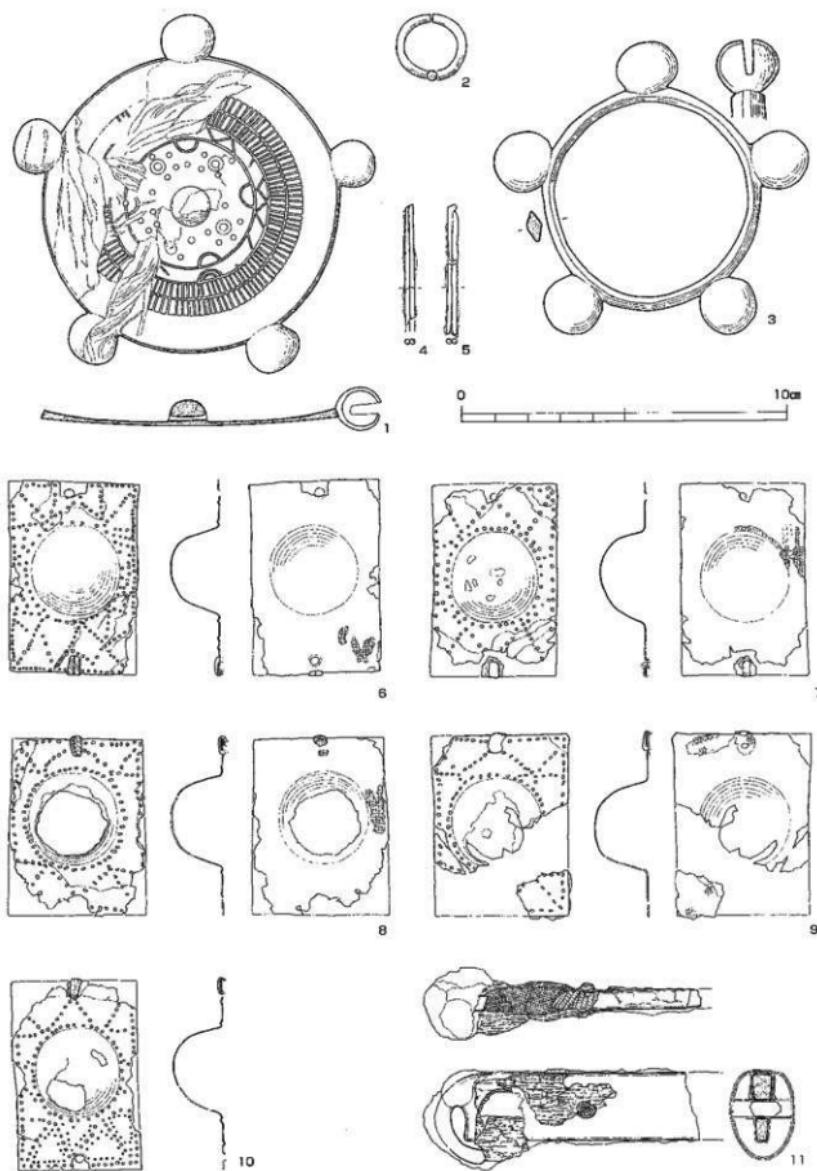
外区は、波紋帶と二重の櫛齒紋帶、そして幅1cmの素紋帶からなり、波紋帶には、二重の半環形紋

様1個が混じる。櫛齒紋は内外2区で紋様が連続する。

これらの外区紋様は、森下章司氏のいう「波櫛櫛」(波紋帶+櫛齒紋帶+櫛齒紋帶)の構成で、倭鏡の中では最も新しい段階のものである(森下1991・2002)。同種の構成をとる奈良県三倉堂遺跡出土七鈴鏡や群馬県化粧板3号墳出土五鈴鏡なども、櫛齒紋は二重になった内外の紋様が一連である。



第2図 遺物出土状況図 (縮尺1/30)



第3図 家形石棺出土遺物 ① (縮尺2/3)

#### B 銀環（第3図2）

1点のみ。2片に割れるが、欠損はない。細い銀の棒を円形に曲げる。径 $2.0 \times 2.2\text{cm}$ 、断面径3mm。

#### C 鈴釧（第3図3）

現存しない。「池田報告」に径2寸2分5厘(6.8cm)。「池田報告」の図ではやや橢円形にみえるが、「山本資料」(山本1995)や写真ではほぼ真円形である。輪状部の断面形は菱形。鈴の丸が何だったか(石か金属か)の記録はない。

#### D 玉類（第4図1~32）

瑪瑙管玉10点<sup>①</sup>、濃青色ガラス小玉17点(両腕位置)、濃青色ガラス小玉29点・淡緑色ガラス小玉106点(頭部位置)、青色ガラス丸玉22点(両足首位置)があったという。頭蓋骨周囲に小玉があり、手玉と足玉が装着されていたと判明する貴重な例だった。ほとんどが現存せず、今は、青色のガラス碎片が、ひとつまみ残っているにすぎない。「山本資料」にある管玉と丸玉の図を示した。管玉は1~6が右腕、7~10が左腕、ガラス丸玉は11~20が左足首、21~32が右足首にあったようだ。

#### E 鹿角装刀子（第4図33~36）

2本出土との報告だが、4本ある。すべて鹿角装刀子。混入とは考えにくいので一括報告する<sup>②</sup>。33は「池田報告」刀子(A)。刃部・茎・柄ともに欠損する。関は両関。出土時に完存していた刃部は、いま半分しかない。現存長9.2cm。鹿角製の柄は断面八角形の面取りがある。出土時は「刃渡2寸8分」(8.5cm)あったとされるが、「山本資料」と比較すると、復元刃部長は7.8cm。

34は「池田報告」刀子(B)。「全長4寸4分」(13.3cm)も、現状7.3cm。「身ばかり」とあるが、茎とそこに付着した柄の鹿角がある。脊側に片關を作る。刃部長7.0cm、茎長6.3cm。全形は「山本資料」によつて復元した。

35は、両関の鹿角装刀子。現存長5.6cm、茎長4.5cm。

36は、片關の鹿角装刀子。脊側に關がある。現存長5.8cm、茎長4.3cm。

#### F 大刀（第3図11）

大刀1振が石棺の北壁に沿って置かれていた。「全長3尺4寸9分」(105.8cm)、「刃渡2尺8寸」(86.8cm)と報告されたが、銹化がはげしく原型が損なわれている。柄頭部分(約8cm)だけはかろうじて残っていたので実測した。

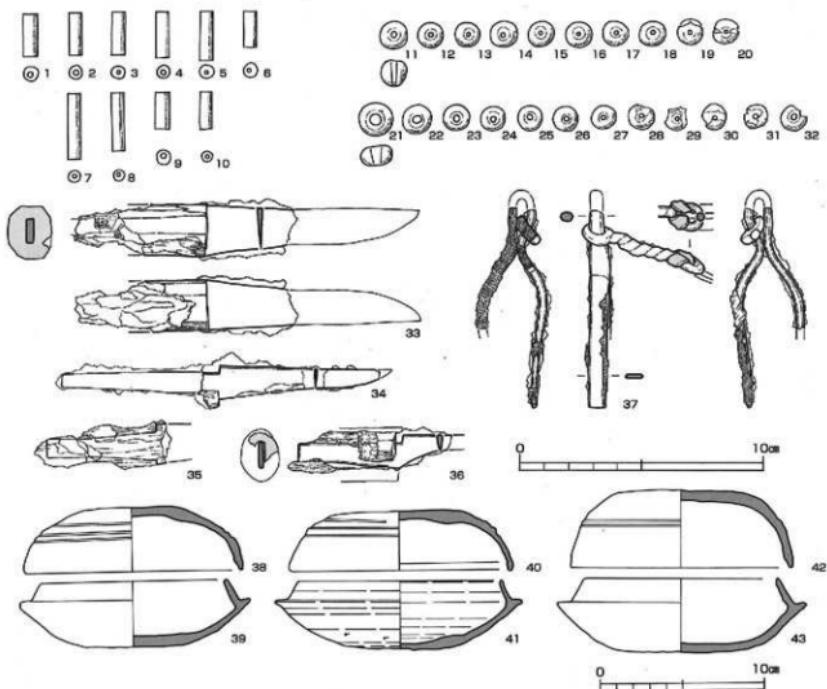
柄の先端は鏽ぶくれで丸くなっているが、X線透過撮影写真によると半円環形の「環頭」がある。環頭に、紐や縄などを通してあった痕跡はみあたらない。

柄は茎落とし込み型式。背には木質がなく、織りの細かい布(紺か)を3~4重に巻いた上に太い糸を巻きつけた痕跡が残っている。目釘は2本。木釘である。柄頭には須恵器と接していた痕跡があり、それをみると「池田報告」にあるように佩表を上にして副葬されていたことがわかる。

#### G 金銅製護拳帯飾金具（第3図6~10、図版2）

大刀の柄の両側から、2列になって計6点出土したが、1点は出土時点で碎けていたという。現在、5点が残る<sup>③</sup>。いずれも、長方形で中央に半球形の膨らみがあり、板状部分に列点紋がある。短辺の中央に2孔をあけ、そこに組紐を通して護拳帯にとめつけてあった。

6は、もっとも残りがよい。大きさは $6.0 \times 3.95\text{cm}$ 。鍍金は表面だけで裏面にはない。列点紋は、



第4図 家形石棺出土遺物 ② (玉と鉄器:1/2、須恵器:1/3)

金具四辺、半球部周囲と対角線のほか短辺側にM字形、長辺側にも弧状の紋様がある。いちばん煩雑である。列点紋はすべて凸表現である。裏面には平織の布の痕跡があり、金具を止めた組紐2条も孔に残っている。

7は、大きさ $6.0 \times 3.8\text{cm}$ 。列点紋はもっともシンプルで、金具四辺と半球部周囲にくわえ、対角線と短辺中央にむかうV字形を飾るだけである。裏面に布が付着する。

8は、大きさ $5.4 \times 4.15\text{cm}$ 。6・7よりも幅が広い。列点紋は7や10と似る。長辺を三分する位置にも列点があるが、短辺のV字形が短い。半球部の直径 $2.9\text{cm}$ あり、ほかより若干大きい。裏面に布の痕跡と、これを留めた組紐の痕跡が残っている。

9は、幅 $4.2\text{cm}$ 、半球部径 $2.9\text{cm}$ あり8と同じ。列点紋もほぼ同紋である。8と9の列点紋はおのおのが長方形をしていて、同じ繋と判断できる。円形(円錐形)の列点紋をもつ6・7・10とは道具が違う。6枚の飾金具だが、紋様にも微細な差があり、複数の工人がその製作にあたっていたことが推測できる。

10は、大きさ $5.9 \times 3.8\text{cm}$ 。列点紋の図案は基本的に7と同じだが、長辺を三等分する紋様が付加されている。また、凸の列点紋と平行する凹の列点紋を片面のみに加えてあるのは、本例だけである。裏面に布の痕跡はない。

#### H 毛抜形鉄器 (第4図37)

「池田報告」に「鉄金具」(5頁、第5図)とあるもの。出土時から、頭部と片方の先端部が欠けている。幅1cmの細い鉄板中央部を断面梢円形にし、そこを曲げて頭部とし、全体を瓢形としたもの。頭部の環には、両端に環のある鉄製の枝をからめる。枝は鉄線をねじってあり、端の環に革紐が固着する。毛抜形をした本体には、表裏ともに織りの細かい布が付着する。本体の現存長8.0cm、復元長8.9cm。枝の全長5.3cm。大刀に挟まって出土したというが、その懸垂具としては華奢である。

#### J 針状鉄器 (第3図4・5)

「池田報告」に「針状鉄片」(5・6頁、第5図IV)。径1mmの細い鉄線2条が密接している。図示した2個体分のほか、碎片2点が残っている。4の現存長3.6cm。

#### K 須恵器 (第4図38~43)

もと、須恵器は蓋杯3組6個があったが、いまは身1個(41)だけが残る。口径13.2cm、受部径15.0cm、器高4.0cm。底部外面は回転ヘラケズリ調整。回転台は時計回り方向に動く。38~40と42・43は「山本資料」の図を反転トレースした。

### 3. 穫穴式石室出土遺物

#### (1) 出土状況

馬具類、弓矢、石突が出土した。調査によって確認されたのは、石室東壁に沿って残っていた馬具類の一部と、東南隅にあった鉄製石突と鉄鎌および矢柄の漆片である。鉄鎌の先端部に泥が付着するので、矢は鎌を下にした状態で東にして置かれていたと判断できる。石室内には遺骸がおかれた痕跡はなかったと報告されている。

#### (2) 穫穴式石室出土遺物

次の遺物が出土した。このうち、石突は現存しない。

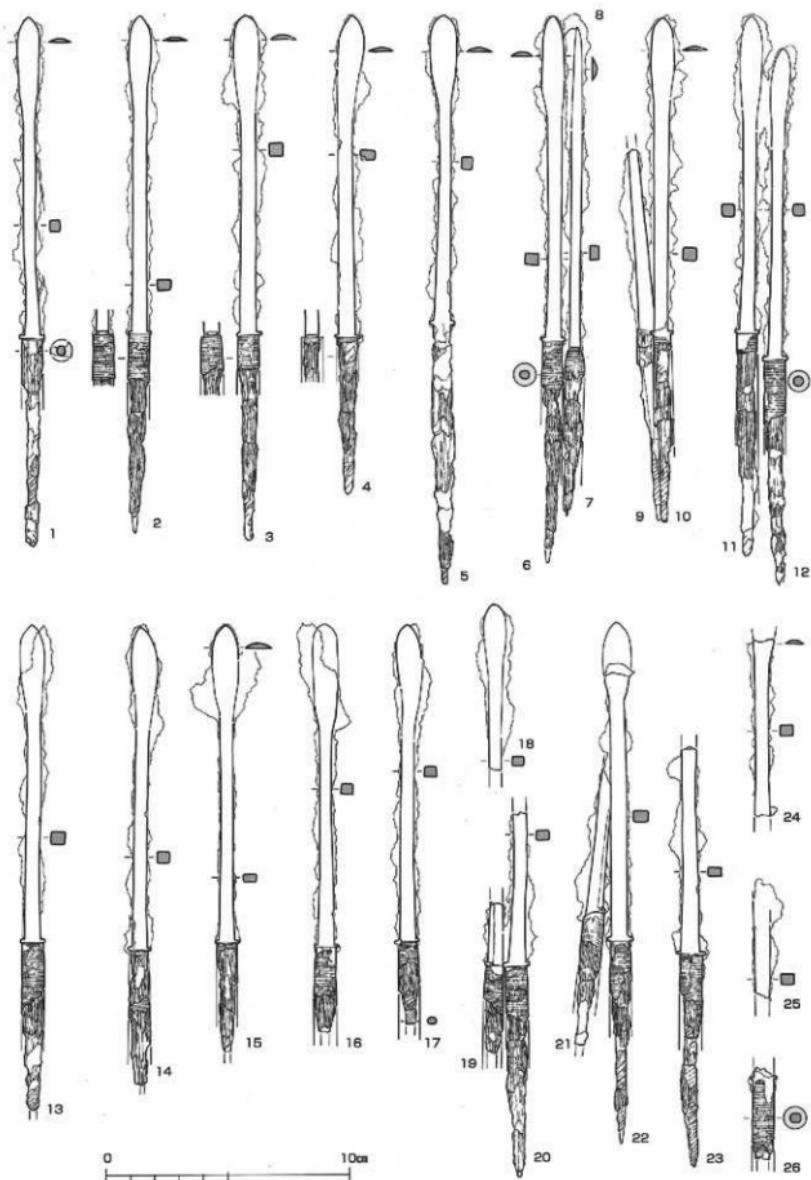
A 矢 47本以上 B 弓金具 1個 C 馬具 2組 D 石突 1個

#### A 矢 (第5・6図)

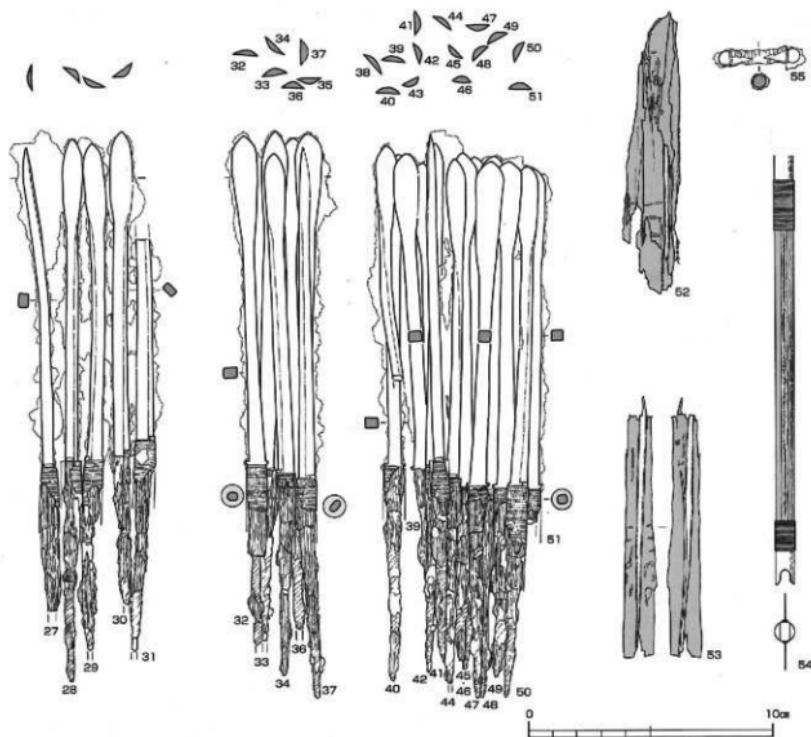
鉄鎌は、1本ずつのもの16点、2・3本が固着したもの5点と、塊状に固着した3ブロックを図示した。これ以外に、茎の先端部4点などの小片が6点ある。頭部の関(範被)<sup>カンヒ</sup>で数えて、47本が現存する。鉄鎌は長頭鎌に限られる。

鎌身部は片丸造で斜関の柳葉形を基本とし、一部に尖端がやや土頭形になるもの(第6図13・21)がある。明瞭な型式差をもった個体は存在しない。頭部は関側がやや太い。頭部の関(範被)は、短く突出した長さ0.3cmほどの板状の突起、棘状関(棘範被)である。ほぼすべての個体で、茎に矢柄の痕跡が残っている。矢柄の先端部には樹皮が巻いてあり(口巻)、また、鉄鎌の茎部には矢柄との間に繊維が巻きつく。苧などを鉄鎌の茎部に巻き、矢柄に挿入したのだろう。同様の例が、松江市御崎山古墳出土鉄鎌にある(大谷1996、31~41頁)。

鉄鎌の全長は、19.6~23.2cmと4cm近いばらつきがあるが、鎌身部および頭部を合わせた長さ(矢柄の先に出る部分の長さ)をみると、12.5~13.4cmで、差は1cmに満たない。しかも、鎌身部+頭部の長さがわかる38点のうち33点(87%)が、12.8~13.2cm、つまり13cm±2mmの範囲におさまる、きわめて



第5図 積穴式石室出土遺物 ① (縮尺1/2)



第6図 壇穴式石室出土遺物 ② (鉄鎌と弓金具、縮尺1/2)

高い規格性がうかがえる。重量は、18.9~25.1g。

鉄鎌以外に、矢羽の部分の箆に塗ってあった漆膜がある。碎片となっているものの、ある程度の形はうかがえる(第6図52・53)<sup>39</sup>。漆膜は、筒状のものが扁平に押し潰された状態で残っている。その筒状の漆膜の左右あるいは表裏には、矢羽基部の羽根軸が痕跡として付着していて、矢羽が2枚立てだったことがわかる(54)。同様の痕跡は、栃木県七廻り鏡塚古墳でも確認されており、やはり2枚立てである。矢羽を固定した矧が何かは判別できなかった。なお、漆膜の表面に、朱あるいはベンガラによる紋様がえがかれてあるが、その意匠まではわからない。53は、長さ10.5cmある。

#### B 弓 (第6図55)

「両頭金具」とよばれる弓の附属金具を1点確認した。円柱状で両端は球形である。<sup>40</sup>全長3.6cm、軸部径0.5cm。軸部には主軸に直交する木理痕跡がある。軸部の長さ2.2cmが弓の直径だろう。弓幹の弭(みだら)近くに取り付けた金具である。栃木県七廻り鏡塚古墳から出土した木製弓は、この部分に4孔がある(大和久1974 51頁第12図)ので、1張に複数が装着されたのであろう。

## C 馬具

鞍金具 2 背分と轡 2 組があるので、2揃えの馬具である。出土状況を復元するすべがほとんどないので、まず、馬具類を個別に記述し、のちほど組合せを復元する。

### a 鞍（第7・9図）

鞍は2背分ある。宮代栄一氏の呼称にしたがって、鞍A=「金属製の磯金具を用いる鞍」と、鞍B=「隠だけが金属製の鞍」に区別する。

鞍 A 鞍Aの全体像を最初に示したのは大谷晃二氏だ（大谷編1996、11頁No.45・25頁No.148・149）。「宮代報告」74頁第8図は、基本的にこの「大谷氏が作成した展示案に従って」作図されている。島根県内から出土した馬具で、海に装飾の金具をあてる例はほかなく、これはじめて示した大谷・宮代両氏の業績は大きいものがある。

宮代氏は、鞍Aの海金具について、次のような特徴をあげている。

- ①破片は縁金具、紙とともにいすれも金銅製である。
- ②L字形の縁金具が3点しかないので、海を3分割する静岡県宇治洞ヶ谷横穴出土例と同型式。
- ③表面に渦巻紋らしきものを列点で表現する。
- ④金銅板の中には列点に沿って板自体が凹凸に変形するものがあるので、海の木質部それ自体にレリーフ紋様があった可能性が高い。
- ⑤磯金具とその縁金具は、左右とも5ヶ所の突起で連接し、それ以外の部分では、釘（鉄）は磯金具を介すことなく鞍に打ち込まれていた。

今回、破片の接合を進めた結果、海の金具は26点となり、部位を特定しかねた7点を除く19点を前輪と後輪に配置して作図した（第7・9図）。

しかしながら、L字形になる縁金具は3点より増えなかった。したがって、鞍の海を3分割する構成だったことはうたがいない。このL字形の縁金具の1点（第9図9）によって、海の外周と磯金具をつなぐように配置された部分の長さは、6.7cmだったことを明らかにできた。この部品は、外周部の曲率からみて後輪にあてるのが妥当であり、これを後輪の海の高さと判断した。さらに、この部分の縁金具裏面には、金銅板の継ぎ目があり（第7図10、第9図7）、海の金銅板が前輪・後輪とも各3枚だったこともわかった。

海の金具に刻まれた列点紋の紋様については、個別の記述で述べる。

鞍金具の材質について検討した結果、紋様板と海の縁金具は金銅製だが、海の釘は金銅製ではなく頭部銀張りの鉄製であることを確認した。

なお、磯金具と洲浜金具の組み合わせは、大谷氏や「宮代報告」と「池田報告」で一致しない。現在、洲浜金具は、完全な形をのこす1点と、2片に分離する1点があり、大谷氏と「宮代報告」は、完全なほうを後輪にあてている<sup>11)</sup>。これに対して、「池田報告」は、前輪の磯金具に完全な形の洲浜金具が接合している状況を伝える。洲浜金具および磯金具の表裏の状況を観察すると、やはり「池田報告」どおりとしたほうがよく、それをあえて逆に組み合わせる根拠をみいだせなかった。よって、本報告は、「池田報告」にしたがう。

前輪(第7図)は、ほぼ全形が残る磯金具2点と洲浜金具があり、これと海金具の破片10点を掲げた。

磯金具は、眉形をした通有の型式である。左右(第7図1・2)とも、鉄地金銅張り本体の周囲に鉄地金銅張りの縁金具をおき、それを頭部銀張りの鉄釘で鞍橋に固定してあった。釘はおよそ1cm間隔で打たれている。鞍はない。磯金具の差し渡しの長さは17cm、洲浜金具は左右10.6cm、爪先の距離は31.5cmである。

磯金具の上辺にある縁金具は、もとは、洲浜金具のそれと一連のものだったが、現状では壊れて分離している。この縁金具は、磯金具・洲浜金具ともその上辺に3個の台形突起をもうけ、そこでのみ釘を貫通させている。これに対して、磯金具の下辺では、突起をもうけず、すべての釘が磯金具本体を貫通する。この部分、後述する後輪とは、違った手法をとっている。なお、磯金具裏面の下辺には、皮革質の物質が詰びついて残っている。

洲浜金具には、裏面に海の金銅板と鞍橋の木部がのこっている。

前輪の海金具はごく薄い金銅板である。それを縁金具でおさえ、頭部銀装の鉄釘で留める。金銅板には列点の紋様がある。

磯金具の上に位置する金銅板(5・10)の紋様は、やや綫長の六角形(いわゆる「亀甲紋」)だ。裏側から打ち込まれ表面では凸となる列点が六角形(対角線長約2cm)を描き、その内側には表側から打ち込まれ表面では凹となる列点が一回り小さい六角形(対角線長約3cm)を描く。六角形の内部に紋様はない。海の爪先近くの下辺にあたる金具片(13)にも、六角形の紋様がある。また、列点に沿って板自体が変形するのは、列点が表裏から打ち込まれた結果だろう。したがって、鞍橋木部にレリーフは存在しない可能性が高い。

洲浜金具(3)に付いている金銅板にも六角形の列点紋様がある。これに対して、洲浜金具の上に位置するとみた金銅板(8)には、凹凸が三重になる円形の紋様がある。渦紋だろうか。

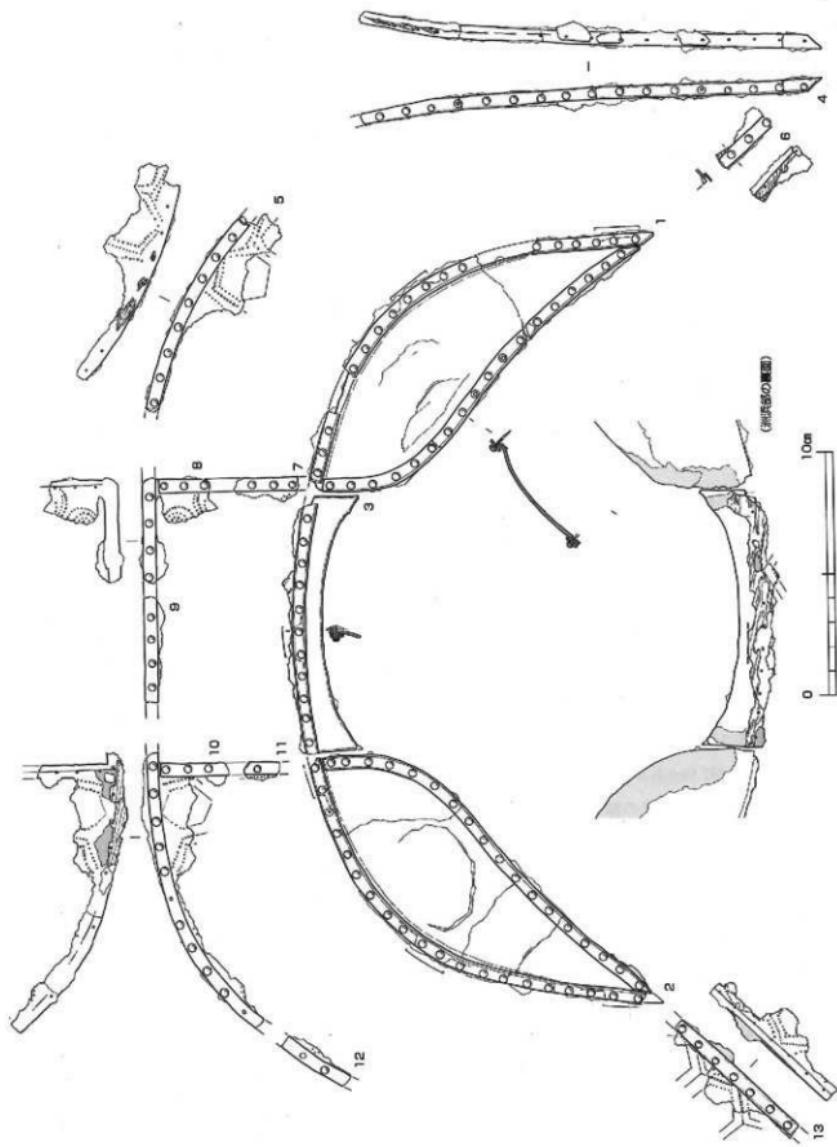
これらの金銅板の裏面には、打ち込まれた釘の周囲などに鞍橋の木部が残っている。木質と金銅板との間には、薄い漆膜がみえる(3・10)ので、木製の鞍本体は、漆塗りだったとみてよい。10の裏面に付着する木質は、縁金具の外側にも広がっている。金属製の複輪はないが、鞍橋は海の金具より1cm程度は大きいものだっただろう。

海の下辺にある金具(6・13)は、鞍橋の木部の下辺が平らになっていた痕跡を残し、その木部の端面には、皮革質が付着する(13)。鞍本体の下面に、緩衝材として革が張ってあったと推測する。

前輪の復元左右幅は約45cm、高さは約30cmである。

後輪(第9図)は、前輪より大型で、磯金具中央に鞍が附属する(1・2)。磯金具の本体は、上辺に3個、下辺に4個、計7個台形の突起がある。そこに釘を2本ずつ貫通させ、そこで縁金具と連結される。それ以外では、縁金具の釘は、磯金具を介さずに鞍に打ち込まれている。下辺部分の作りが、前輪と異なることが注意される。磯金具の下辺には、前輪と同様、一部に皮革質が付着する。

鞍(1・2)は、刺金のない凸字形の輪金で、鉄地金銅張りの八角形座金具をともなう。座金具は平板で、鞍Bのそれのような膨らみはない。輪金は長さ6.5cm、幅4.7cmである。(2)の輪金の基部には、幅1cmの脚がからむ。(1)の鞍は、脚部が失われている。



第7図 積穴式石室出土遺物 ③ (鞍A前輪 縮尺1/2)

脚部は2条あるうちの片方だけが鞍橋の裏面に抜け、それを鉤形に曲げて固定してある。鞍の裏面を示すと推定される木部の痕跡は、表面にあたる礎金具裏面とは平行しない。したがって、馬膺に接する居木先の部分は、縦断面で台形になっていたのだろう。

洲浜金具(3)は2片に碎けていて、中央部を欠損する。金具の両端には、釘2本が貫通する突起があり、片方の突起には縁金具が残る。同じ突起が中央部にもあるかどうかは確認できないが、前輪と同じく突起があったと推測する。

海の金具は、9点を示した(5~13)。礎金具の上に位置する破片(10)は、2本の縁金具がL字形に接している。礎金具に向う縁金具は長さ6.7cmある。この破片および2片(7・11)に、六角形の列点紋様が確認できる。

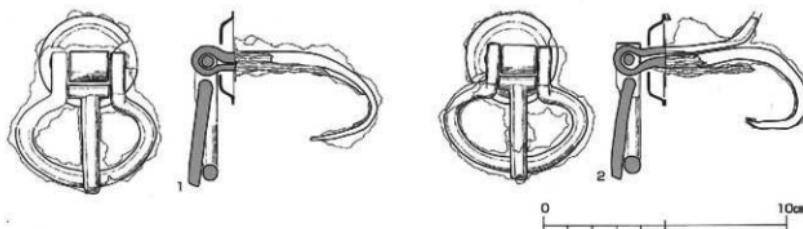
一方、爪先の破片(5)は、わずかしか金銅板が残っていないが、その列点はやや乱れているように見える。海の中央部から六角形を配置してきて、隅の爪先部分では変形させておさめるのだろう。この列点は縁金具が重なる部分にも存在するので、当然、列点紋施紋後に鞍橋に貼ったものである。金銅板の裏面には木質が残り、両者の間には漆膜がみえるので、鞍の表面は漆塗りだったとみてよからう。

**鞍B** 鞍Bの鞍(第8図)は、鉸具・座金具とも鉄製。金銅装や銀装はない。2点あり、ともに鉸具は、T字形の刺金を凸字形の輪金に挟み込む型式である。鉸具の基部に短い鉄棒を挟み込み、その両端を輪金の外側に突き出させて叩き止めてある。そして、ここに幅の狭い脚部をからめ、座金を通した後、鞍の本部に脚部を打ち込んで固定されている。

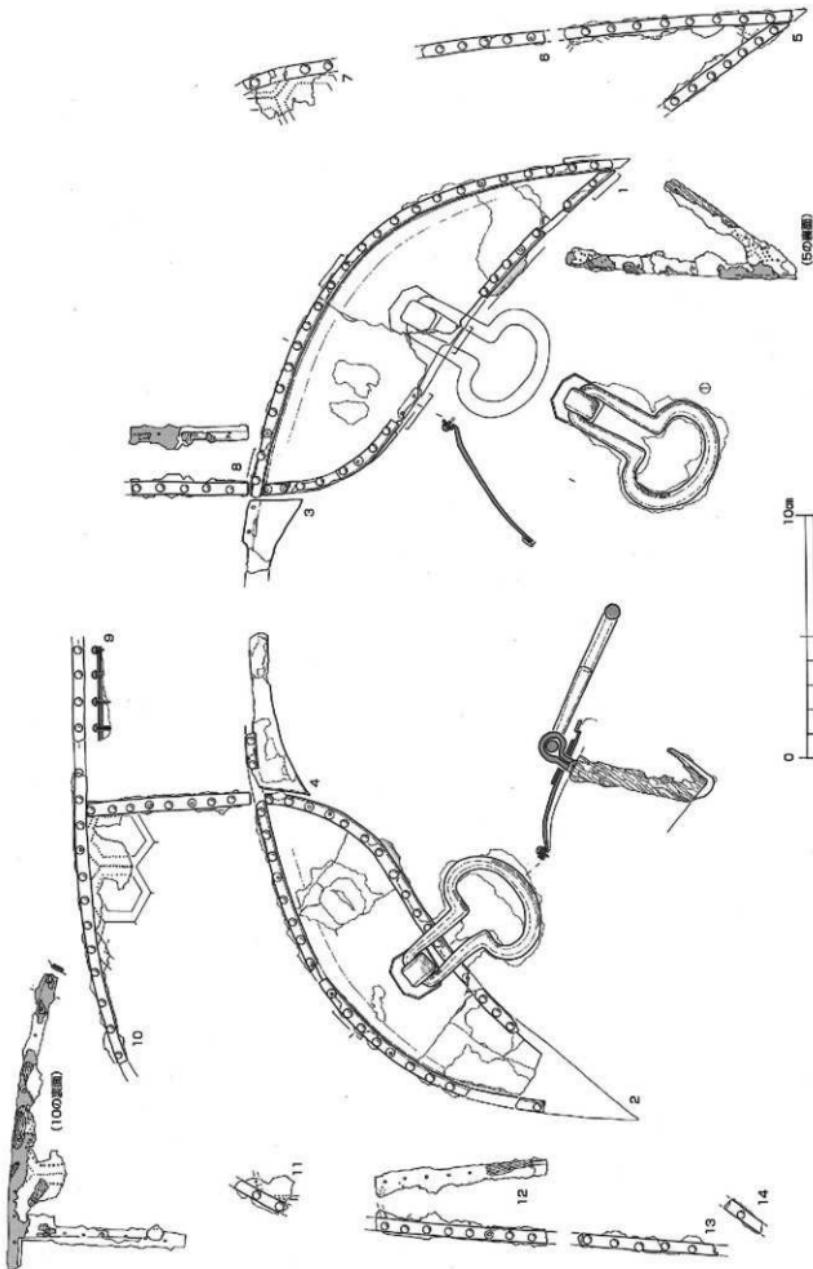
脚部は、一方の鞍(第8図1)では、その先端を合わせずに片方を長くし、短い方の側へ曲げて先端をU字形にしている。もう片方の鞍(2)は、短い方の脚部を逆のほうに曲げる。その脚部の先端は上下に開いているが、木部の厚さを考えると、鞍本体から脱落してからの変形だろう。

鉸具の大きさは、1がタテ5.8cm、ヨコ(幅)5.8cm、2がタテ5.2cm、ヨコ(幅)5.9cmである。脚部の長さは、1が7.5cm、2が7.9cmである。

座金具は、周囲に鉤状の縁取りをつけた低い笠形の金具である。座金具の裏面には漆膜が付着するので、鞍の本体の表面は、漆塗り仕上げだったことがわかる。座金具の直径は、1が4.0cm、2が3.9cmである。



第8図 穫穴式石室出土遺物 ④ (鞍B鞍 縮尺1/2)



第9図 穫穴式石室出土遺物 ⑤ (鞍A後輪 縮尺1/2)

## b 備

f字形鏡板付櫛と素環鏡板付櫛がある。

**f字形鏡板付櫛** 鏡板2枚と銜・引手すべてが残っている。鉄地金銅張りの鏡板は、左(馬の頭部の左側に装着される側)のそれ(第10図1)が、全長19.8cm、立聞を含めた幅10.3cm、右(2)が全長20.1cm、幅10.3cm。鉄の地板に縁金を重ね、金銅板を重ねた後、頭部銀張りの鉢を重打ちしてとめる。鉢の数は、左の鏡板が周間に71本と中央に10本、右の鏡板が周間に74本と中央に10本。銜の端環は、鏡板の中央にあいた梢円形の孔からのぞいている。そこに長さ3.5cmほどの細い銜留めの板を通して、その板の両端を鉢留めして固定される。銜留めを固定する鉢は、縁金と地板をも貫通する。引手は、鏡板の内側で銜と連結される。

立聞には、面繫と連結する吊金具がある。いずれにも2列計10本の頭部銀張り鉢がある。左の吊金具は長さ7.5cm、幅2.1cmで、鉄地銀張りの貴金属2条が残り、裏面には幅2.8cm、厚さ0.8cmの革帶の痕跡がある。右の吊金具は、長さ7.3cm、幅2.1cm。貴金属を欠き、裏面の革帶の痕跡は断片的である。

銜は二連式。銜の端環に直接、引手がからめてあり、間に遊環を介さない。

引手(3・4)は、別造りの瓢形引手壺をからめる型式。引手棒と引手壺のあいだに、兵庫鎖はない。引手棒の手綱側の端環近くには、幅1.5cmほどの革帶が銹付いていて、これは手綱の一部のようである。引手壺にも表裏に革錆が付着し、手綱のからめ方が推定復元できる。引手の全長は18.3cm、引手壺は長さ7.4cmと7.2cm、幅は5.2cmある。

島根県内でのf字形鏡板付櫛の出土例は、ほかに出雲市半分古墳(松本編1999)と浜田市めんぐろ古墳(山本1971)があるが、ほぼ完全に残るのは本例のみ。鏡板の銜先にキャップを被せるめんぐろ古墳例は、上島古墳例より新しい型式である。

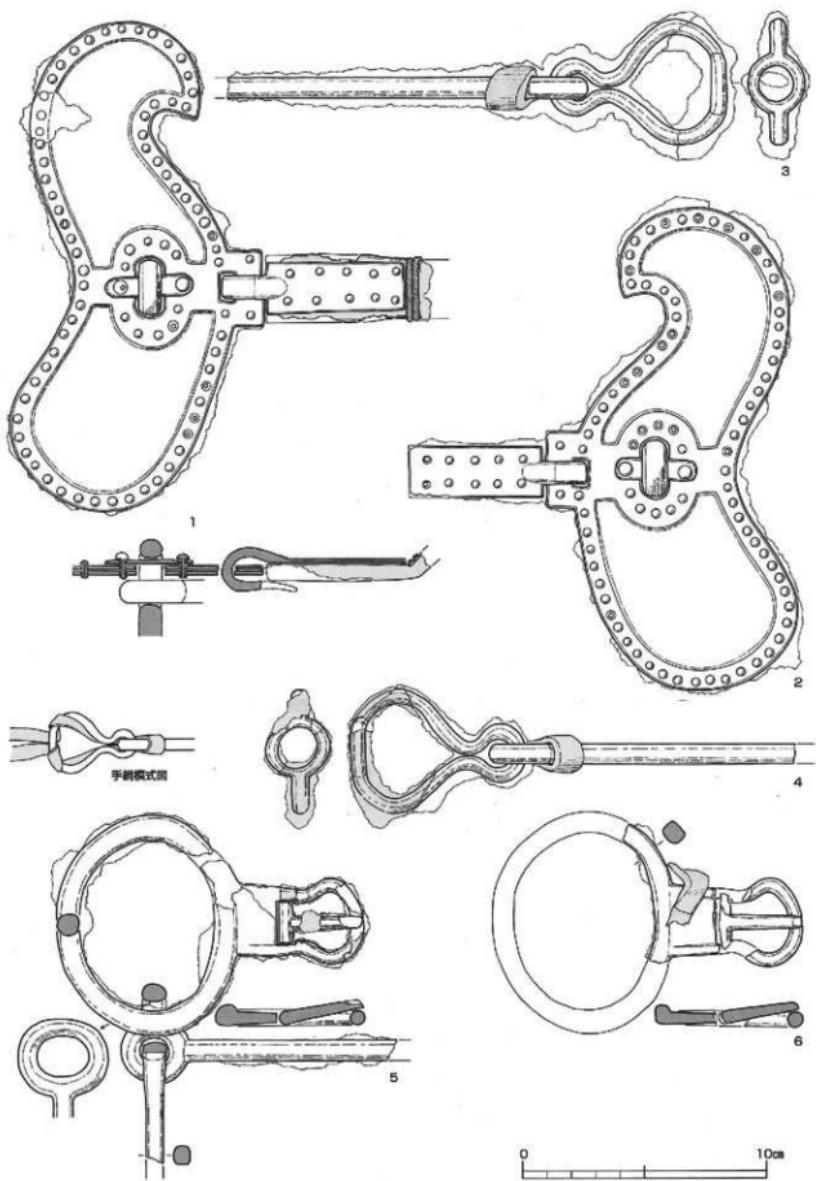
**素環鏡板付櫛** 立聞の鉢具が脱落していた以外、出土時にはほぼ全形をとどめていたようだが、現状では、銹による傷みがひどく、原形をとどめない部分もある。形の残っている部品を実測した。

片方の鏡板(第10図5)は、ほぼ原形を復元できた。梢円形でやや大型の環体部をもった鏡板である。立聞には、T字形の刺金をもつ鉢具を作りつける。立聞と環体は、表は段差を設けてあるが、裏面には段差がない。鉢具の刺金は、Ω形の輪金に挟み込んであって、刺金の軸の両端を細くし、それを輪金の内側にあけた孔に差し入れている。輪金を含めた鉢具は、環体にもうけた四角い突起の両側面に鍛接で固定されたらしく、立聞側面は浅い段をなして分厚くなる。環体部の長径9.1cm、立聞は高さ5.2cm、輪金の径3.5cm。なお、立聞には面繫の革帶の痕跡が残っている。

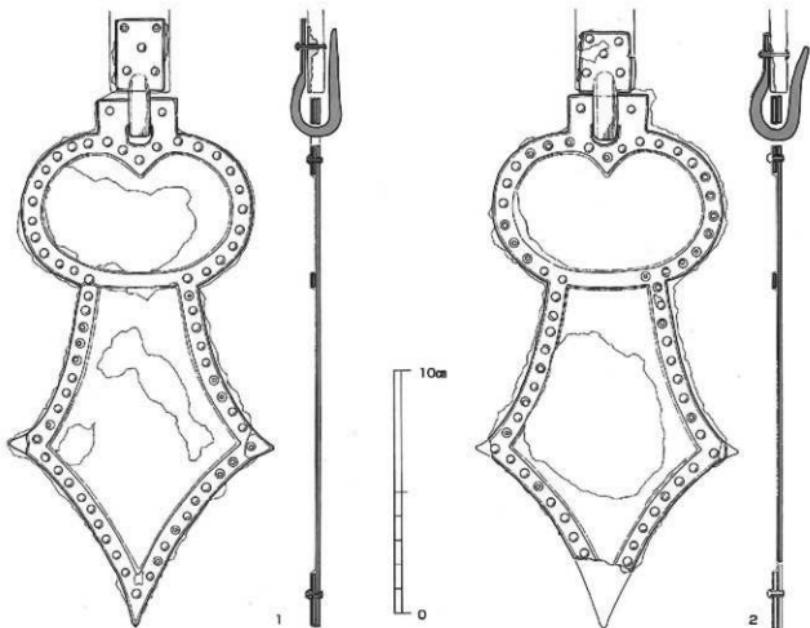
環体部には、銜と引手が一部残る。銜の端環は長径3.6cmあって大きい。引手は、この銜の端環にからめてある。銜枝の現存長7.4cm、引手の残存長は11.3cm。「山本資料」によると、銜の全長は14.5cm、引手は18.6~19.1cmあったようだ。

破損のひどい鏡板(6)は、立聞部のみを示した。環体部は、断面が隅丸四角形をしていて頑丈な印象を受ける。立聞の基部に革帶の痕跡がある。

T字形刺金の鉢具を立聞とした素環鏡板付櫛(「鉢具造り立聞a類」(花谷1986))は、ほかに、和歌山県鳴滝1号墳例がある。こちらも環体の断面形が四角く、造りが似ている。



第10図 穹穴式石室出土遺物 ⑥ (書 線尺1/2)



第11図 穫穴式石室出土遺物 ⑦ (剣菱形杏葉 縮尺1/2)

c 杏葉 (第11・12図)

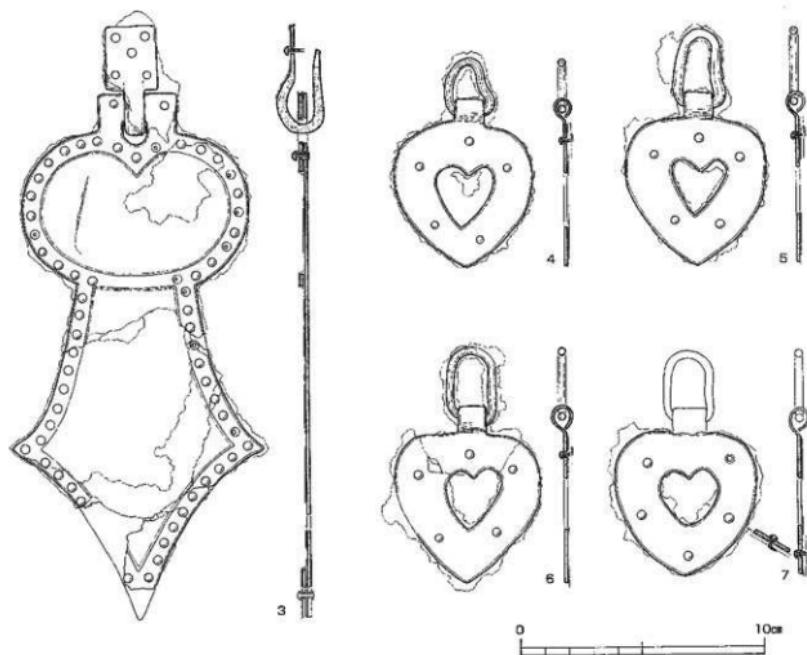
鉄地金銅張りの剣菱形杏葉3枚と、鉄製心葉杏葉4枚がある。

**剣菱形杏葉** ほぼ全形をとどめる1枚と剣菱部を欠損する2枚がある(第11・12図)。

1は全体が残る。剣菱部が大きく、その下端は長く尖る。偏円部の下辺はゆるくカーブしており、ここだけには鋲留がない。鉄の地板と紋様板に1枚の金銅板を重ね、頭部を銀張りした鉄錆でかしめて留める。錆は、偏円部と立間に29本、剣菱部に39本の合計68本。立間に、革帶を5本の錆で留めた吊金具がからむ。全長21.6cm、剣菱部の幅10.8cm、偏円部の幅9.4cm。吊金具の全長4.9cm、幅2cm。

2は、剣菱部の先端を欠損する。偏円部と立間に計28本、剣菱部には35本(もと40本か)が残る。復元長21.9cm、剣菱部の復元幅10.7cm、偏円部の幅9.4cm。吊金具は全長4.5cmあり、1よりもやや小型である。

3は、剣菱部に欠損があるが、ほぼ全形は残る<sup>10</sup>。頭部銀装の錆が、偏円部と立間に28本、剣菱部には34本が残る。復元全長21.6cm、剣菱部の幅10.3cm、偏円部の幅9.3cm。吊金具は全長4.6cm、幅2.1cm。2と3は、錆の数や、偏円部と剣菱部との境の錆配置、吊金具の大きさがよく似ている。



第12図 竪穴式石室出土遺物 ⑧ (剣菱形杏葉と心葉形杏葉 比尺1/2)

#### 心葉形杏葉

鉄製で中央に心葉形の透かしを入れた杏葉である<sup>15)</sup>。4枚ある(第12図4～7)。

立開部は、鉄板を管状に巻いた簡略なもので、梢円形あるいは洋梨形の小さな環が掲めてある。3枚は下半部がややスリムだが、1枚(7)は丸みがつよく、これだけは鉄の配設がちがっている。また、(7)は懸垂用の環を失う。いずれも、裏面に漆膜が付着していて、漆塗りの薄い皮革製品を留めたとみてよい。鉄の折り返し(7)からすると、皮革製品は厚さが2mmほどだったらしい。

4は、本体の全長6.9cm、幅5.7cm、環を含めた全長8.5cm。5は、本体の全長7.2cm、幅5.7cm、環を含めた全長9.7cm。6は、本体の全長7.3cm、幅6.0cm、環を含めた全長9.8cm。7は、本体の現存長6.0cm、幅5.9cm。6は、素環鏡板付轡に銷び付いていて、両者が近接して置かれていたことを示している。

#### d 雲珠 (第13図3～5)

無脚の半球形雲珠、半球形六脚雲珠と鉄製円環が各1点ある。

**無脚雲珠** 周囲に平らな縁取りをもった低い半球形の雲珠(第13図3)。鉄地金鋼張りで、縁辺にやや大きな頭部銀装の鉄鋲を16本並べる。鋲は多くが脱落している。直径13.0cm、高さ2.6cm。

**六脚雲珠** 6本の脚が、半球形の鉢部から放射状にのびた雲珠(第13図4)。鉢部は大きく、直径6cm、高さ3.0cmある。側面に凹線ではなく、縁にわずかな段がある。脚は幅1.5cm～2.0cm、長さ2cm前後。

鉢部に比較して華奢である。先端に頭部を銀張した鉄鋲を1本ずつ打ち込んでいる。脚の基部に資金具の痕跡があるものの、その詳細は不明。全体に錆化による破損・変形がひどい。

**鉄製円環** 直径6.6cm、環体の幅7mm・厚さ3.5mmあり、環体の5箇所に革帶の痕跡がある(第13図5)。無脚雲珠と組み合わせて使用されたものだろう。

**e 金具 (第13図1・2・6~34)**

半球形で無紋の鉢部をそなえた辻金具2点(1・2)と、組合式の十字形辻金具がある。

**四脚半球形辻金具** 1が $7.3 \times 7.4\text{cm}$ (高さ2.0cm)、2が $7.4 \times 7.5\text{cm}$ (高さ1.9cm)あり、鉢部直径はともに3.7cm。四方に幅1.5~1.6cmの脚がつき、辻金具本体は鉄地金銅張りである。そこに頭部径0.8cmの円頭鋲を打ち、基部には刻みのない資金具1条をつけて革帶を固定する。鋲頭と資金具は銀張り。2には、軸Aの海金具の破片(第9図12)が錆び付いている。

**十字形辻金具** 部品が27点ある(第13図6~34)。鉄地金銅張り。裏面には革帶に通した隠し釘がある。

方形金具9点と爪形金具18点に大別でき、方形金具は正方形6点と長方形3点にわかれる。

正方形金具は、大きいのが $2.6 \times 2.6\text{cm}$ (6)、小さいのが $2.4 \times 2.4\text{cm}$ (11)。金具の裏面には、革帶2条が重なった状況<sup>20</sup>で残っている。10は4片に紛けて、表面の金鋼板がほとんど失われる。

長方形金具は、短辺1.9cm、長辺2.2cm前後の大きさ。14は、短辺に接して銀張りの資金具が2条附属する。資金具に刻み目があるかどうかは不明。隠し釘は、14で長さ1.3cmが残る。

爪形金具は1点のみ大きく破損するが、ほかはほぼ形をとどめている。長さは1.9~2.2cm、幅は2.2~2.5cm。長さ2cm、幅2.4cmが平均的である。裏面の隠し釘は15~17で全長1cmとわかる。長方形金具のものより短いのは、革帶を1条しか留めないためだろう。釘の先には、革製とおぼしきワッシャがある。長辺に沿って刻み日のある鉄地銀張り資金具が付着するものがある(17・30・31)。

十字形辻金具の部品から遊離した、銀張り資金具の破片も4点ある(33・34)。

**f 板状金具 (第13図40・41)**

木製品にあてて鉄釘で留めてあった小さな鉄板が2枚ある。40は、 $8.1 \times 1.7\text{cm}$ の薄い鉄板に鉄釘を4本、41は、 $9.2 \times 2.0\text{cm}$ の鉄板に鉄釘9本を打ったもの。40の鉄釘は長さ2.3cmある。裏面の木質は鉄板の長軸とは斜交し、しかも両者で傾きが違う。「宮代報告」では「鎧金具」とするが、鎧の金具とする積極的な理由がみいだせない。

**g 鋸具・そのほか (第13図35~39)**

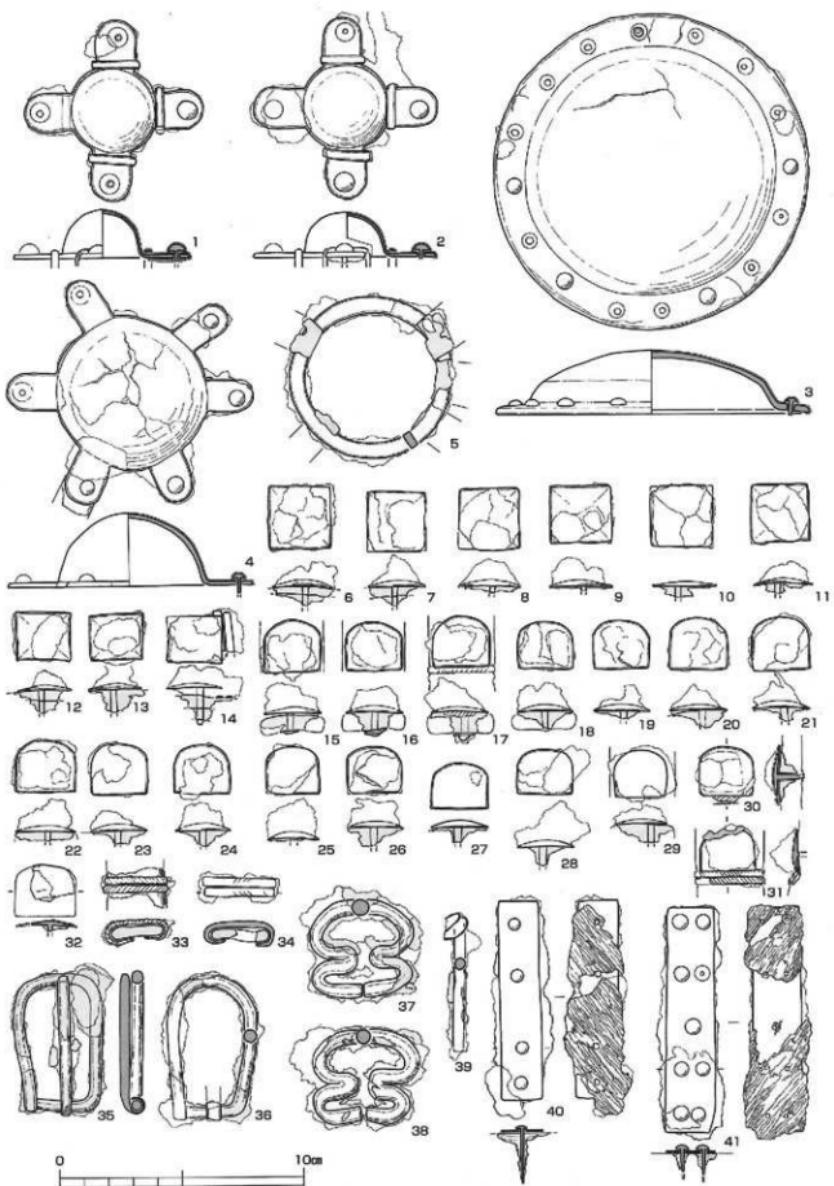
いずれも鉄製。こはゼ形鋸具2点(35・36)は、輪金の短辺に刺金をからめる型式。36は刺金を欠損する。輪金は、細い鉄の棒を輪にして、一端で固定したもの。35が長さ5.8cm、36が長さ6cm。

8字形鋸具2点は、ほぼ同形である。直径5mmの鉄の棒を曲げて作られている。37は長さ4cm、幅4.3cm、38は長さ4cm、幅4.4cm。

39は、長さ5.6cmの棒状鉄製品。一端に小さいU字形の鉄板を貫通させているようにみえる。馬具類に混じって出土したらしい。

**D 石突**

石突は現存しない。「池田報告」に、長さ3寸2分(9.7cm)、径約1寸(3cm)。内部に木質が残存していたようだ。穂先はみつかっていない。



第13図 竪穴式石室出土遺物 ⑨ (雲珠、辻金具、その他の馬具 縮尺1/2)

#### 4. 墳丘出土遺物

「池田報告」には、「開墾中、相当量の祝部式土器・土師器の破片が出土している」として、須恵器の大型壺口縁部・把手付椀・蓋杯・脚部、土師器高杯の図が掲載されている<sup>19</sup>。

石棺と石室から出土した遺物とともに上島古墳奉賛会で保管されてきた土器は、いずれも須恵器破片で、蓋3、輪状つまみ蓋2、長脚高杯2、椀2、提瓶1、甕頸部1、甕胴部15がある。

今回、これらとあわせ、旧大社町立史跡猪目洞窟遺物包含層出土品収蔵庫(通称、大社考古館)に保管されてきた須恵器を紹介する<sup>20</sup>。これは、1951年(昭和26)1月10日付で大社考古学会から大社町に寄贈された資料群のひとつである。その時の「古代遺物寄贈品目録」に「十、出雲市簸川郡内各遺跡出土品」の「一、國富村上ヶ島古墳出土須恵器破片」とある資料である(大社町2002、181~188頁)。故大谷從二氏が収集されたもので、70.0×51.5×19.5cmの木箱に収納されていた。

すべて須恵器片で土師器は含まれない<sup>21</sup>。二つの資料を合わせた須恵器の種類とその個体数は、以下の通りである。なお、須恵器の大半は大谷氏収集品。詳細は観察表を参照のこと。

A 有蓋高杯	11個体以上(同・蓋 13個体)	B 無蓋高杯	3個体	C 高杯	3個体
D 把手付椀	3個体	E 足	1個体	F 提瓶	8個体
G 広口壺	5個体	H 蓋付短頸壺	1個体	J 甕	11個体以上
K その他					

##### A 有蓋高杯 (第14図1~18)

蓋13個体、杯部および脚部は11個体以上を確認した。3種類(A~C)に分類した。

**有蓋高杯A** 普通の蓋杯に脚を接合した形で、脚部の裾は屈曲して外にひらく。脚部中段に浅い凹線があり、それを境に、三角形の透かしが上下千鳥配置にして三方にあけてある<sup>22</sup>。杯部の立ち上がりの端部内側には、浅い凹線状の段(第14図2)または浅い凹線(6)を入れるものと、それらのないもの(4・12・13)があり、後者が多い。脚部の内外面はヨコナデ調整され、内面にしづり目はない。

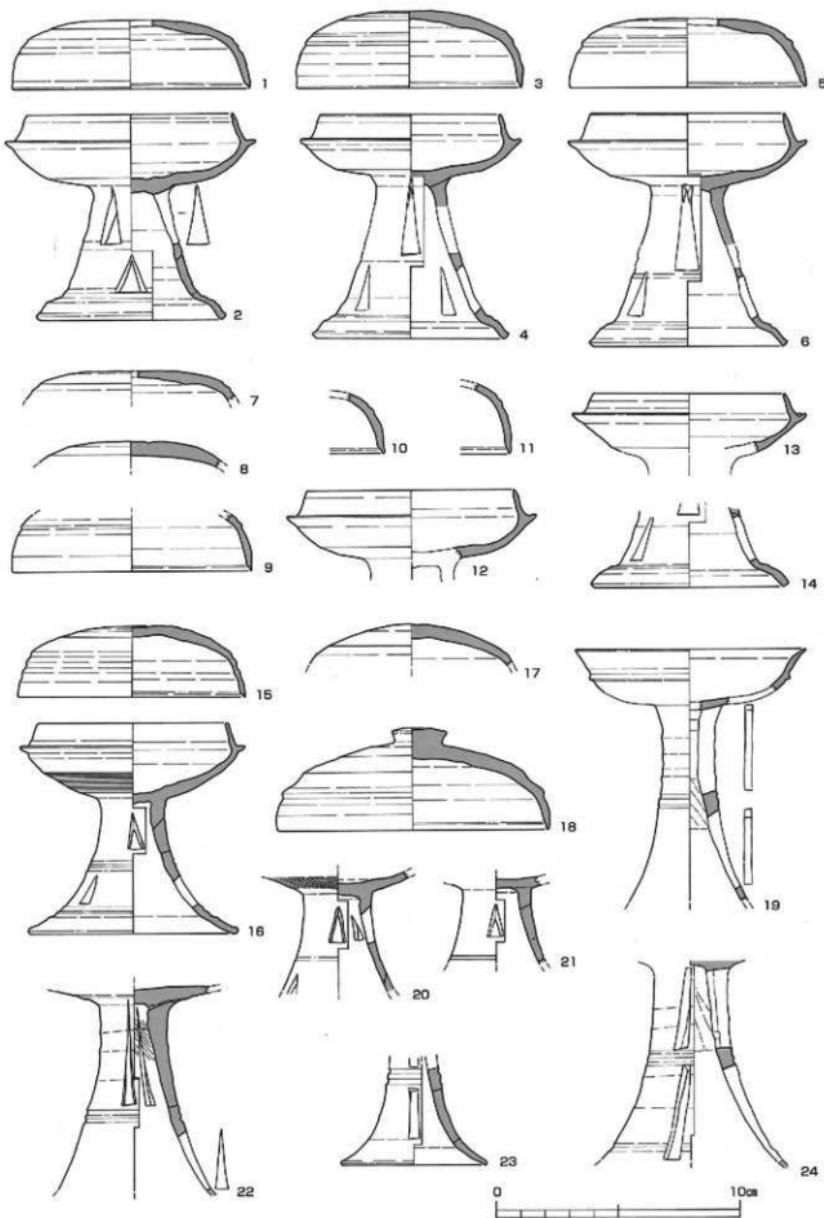
蓋(1・3・5・7~11)にはつまみがなく、一見したところ、杯蓋と区別しづらい<sup>23</sup>。天井部と体部との境に浅い凹線を2条入れ、その間をやや太い凸線としている点が違う。天井部外面はいずれの個体も、左回りの回転ヘラケズリ調整である。口縁端部内面は、浅い段あるいはさじ面をなしている。

胎土には、ほとんど砂粒が含まれず、特に精良であり、焼きも硬い。蓋10個体、高杯本体10個体以上があり、上島古墳から出土した有蓋高杯の大半がこの型式である。

**有蓋高杯B** 蓋2点と高杯本体1個体がある(15~17)。杯部の形態は有蓋高杯Aとほぼ同じだが、脚端部は屈曲することなく、ゆるく外反する(16)。脚部の透かしは三角形で、2段に三方へ千鳥配置にあき、脚部中段と透かしの下段に、2条一对の凹線がある。透かしは、有蓋高杯Aより小さい。

蓋(15・17)は、有蓋高杯A同様につまみがなく、その点では似ているが、天井部の丸みが強く、口縁部がやや薄いことで区別した。胎土がやや粗く、色調も灰色ないし灰白色という点でも、有蓋高杯Aとは区別できる。

**有蓋高杯C** 高杯本体は確認できなかったが、やや大型でつまみ付きの蓋1点(18)がある。つまみはボタン形。天井部と体部の境にははっきりした凸線がある。口縁端部は浅いさじ面をしている。天井部は広い範囲を回転ヘラケズリ調整でしあげる。



第14図 墳丘出土遺物 ① (須恵器 高杯 縮尺1/3)

#### B 無蓋高杯 (第14図19~21)

無蓋高杯は2種類ある。

無蓋高杯A 1個体がある(19)。浅い杯部は、口縁部が大きく外反する。細長い脚部には、2段二方に細い長方形透かしがある。

無蓋高杯B 杯部の外面に櫛描き列点紋があるので無蓋高杯とみた(20・21)。脚部には、2段三方に三角形の透かしがある。脚端部の形状は不明。胎土と焼成は有蓋高杯Bと同じである。

#### C 高杯 (第14図22~24)

杯部が欠損し、脚部だけのものが3個体ある。

22は、2段三方に細長い三角形透かしを配置した脚部。透かしは上下が千鳥に配置される。

23は、小型の脚部。2段三方に長方形透かしがある。上下の透かしは一列である。

24は、2段三方、上下一列に長方形透かしをいた脚部。三方向の透かしは、互いに直交ないし対向して、上からみるとT字形に配置されている。

#### D 把手付椀 (第15図1・2)

1は、口縁部の下端に凸帯があり、それ以下の胴部には波状紋がある。把手を付けた時のナデの痕跡があって把手付椀とわかる。

2は、口縁部が直立し、胴部には波状紋がある。底部はカキ目調整。口縁部と胴部の破片2点があり、それらには把手の痕跡はないが、同一個体と思しき図が「山本資料」第十九図(「池田報告」第6図)にあるので、把手付と判断した。口径10cmの小型品である。波状紋は1よりも細かい。

#### E 瓢 (第15図3)

大きく開いた口縁部をもつ。口縁部と頸部には、斜行する条線紋がある。口径16.0cm。

#### F 提瓶 (第15図4~8)

口縁部や把手部分の破片からみて、7個体ある<sup>20</sup>。5個体を図示した。

4は、腹面がおおきく膨らみ、そこに櫛描き波状紋を入れた提瓶。口縁部と胴部ともに器壁が薄い。把手は鈎形である。側面はカキ目調整、背面はヘラケズリ調整。

5は、腹面・背面ともにゆるく膨らんだレンズ状の胴部をもった提瓶。4よりやや大きい鈎形の把手がつく。口縁部は端部が丸い。腹面と背面はともにカキ目調整。

6は、胴部内部の調整痕から提瓶とみた。口縁端部の形状は、広口壺に似る。把手の形態は推測。松江市御崎山古墳に類品がある(大谷1996、50頁第30図23)。

7は、頸部が太く、器壁は薄い。上下を胴部に貼り付けた環状の把手をもつ。

8も環状の把手をもつが、背面は扁平な形状をしている。細い頸部は、胴部に孔をあけて接合されている。

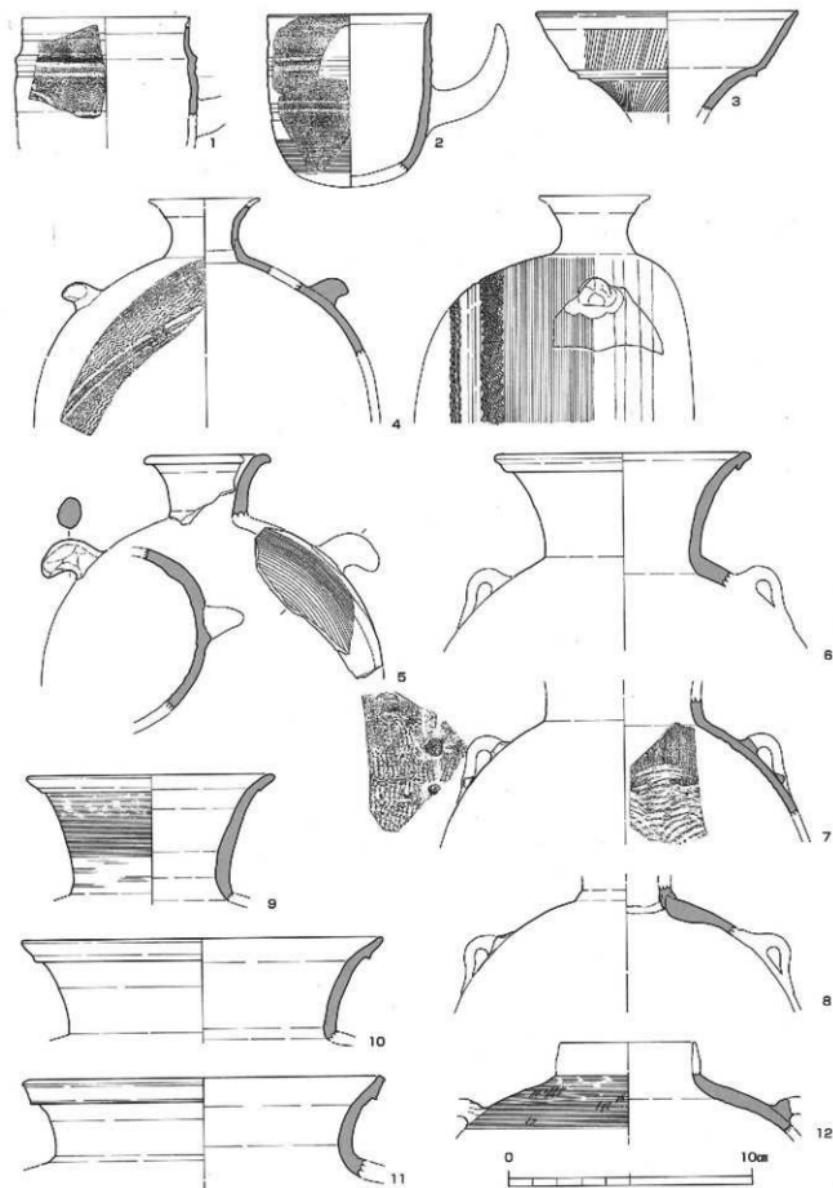
このほか、環状の把手部分の破片が2点ある。4~8とは別個体である。

#### G 広口壺 (第15図9~11)

3個体を図示した。ほかに2個体、計5個体分の破片がある。

9は、頸部がやや細い。外面をカキ目調整したのち、口縁部と頸部にはヨコナデ調整を加える。

10・11は、頸部に長短はあるが、口縁部の形状はよく似ている。



第15図 墳丘出土遺物 ② (碗・壺・提瓶など 縮尺1/3)

#### H 蓋付短頸壺 (第15図12)

把手の付く肩部の破片2点1個体がある。蓋はみあたらないが、重ねて焼いた痕跡がある。胴部は叩き成形の後、肩部外面をカキ目調整。その後に、把手を貼り付けている。把手は下端を失い、鉤形か環状かはわからない。

#### J 壺 (第16図)

口縁部の特徴などから10個体を識別できた。

1は、口縁部から胴部の一部まで残した資料。口頸部は凹線で3段に区画し、その2段に櫛描波状紋をめぐらす。各段の波状紋は、おのの2回の施紋によっている。胴部は外面に擬格子叩き痕、内面に同心円紋あて具痕を残す。胴部上端の頸部が剥離した面には、叩き痕が残っており、胴部成形後に別に作った口頸部を接合したことがわかる。口径40.4cm。

2は、肩部以上を残した資料。口頸部の形状や紋様は、1とよく似ている。胴部と口頸部を接合する手法も1と同様だが、口頸部下端の内面にあて具痕がみえる。口径42.0cm。

3は、口縁端部が不明だが、頸部を凹線で4段に区画し、上の3段に櫛描き波状紋をめぐらせる。

4は、口縁端部がつよく外反する口縁部破片。波状紋は2段ある。口径43.0cm<sup>20</sup>

5以下は、口径を復元算定できなかったもの。5・6は、口頸部を凹線で3段に区画し、波状紋を2段にめぐらせる。8は、凹線で4段に区画し、波状紋が3段ある。

#### K その他

奉賛会で保管された資料に、輪状つまみのつく蓋1点と、同型式のものと思われる蓋の口縁部1点がある。混入品だろう。

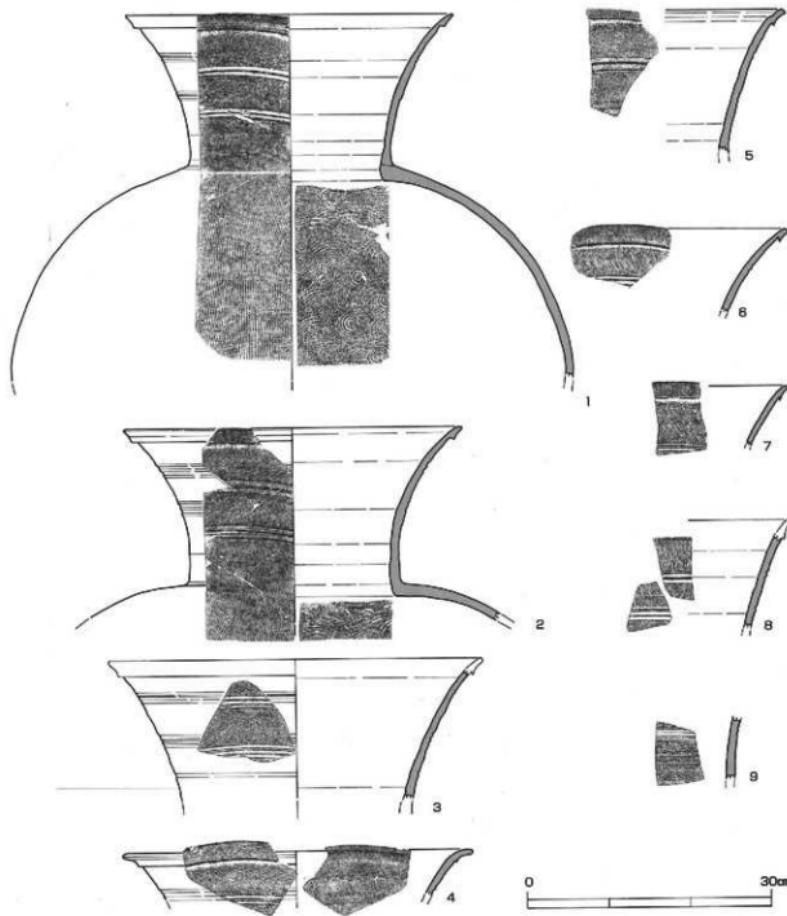
### 5.まとめ

上島古墳の出土遺物については、これまで各種の報告がなされてきたが、今回改めて観察をし、また未公表資料を「再発掘」するなどして、現時点での全容を示したと考える。もちろん、過去の報告を追認することが多かったものの、あらたな知見も提示できたのではないかと思うので、そのあたりを中心にまとめておきたい。

鏡や装身具類 その多くが現存しない。五鈴鏡の図を復元的に作図したので、今後、類例の確認をおこないたい。

武 器 家形石棺から出土した大刀について、柄頭部の形状、茎落とし込み構造の柄、そして柄巻が布と糸だったことを確認した。これに附属する金銅製護拳帯飾金具は、発見当時の写真によって、護拳帯が2条あり、これに3個ずつ縫い付けてあったと考える。飾金具は5点が現存し、列点紋を打ち出したタガネにも差をみいだせた。柄頭の形状も特殊であり、一風かわった格えの大刀だったようだ。

竪穴式石室から出土した武器に関しては、弓の副葬が確認できたことと、矢についても新たな知見をくわえた。矢は47本を数えることができるので、副葬時点では单一型式の50本を胡籠に納めていたとみてよからう。矢羽は2枚羽と確認できた。山陰地域ではまれな資料である。



第16図 墳丘出土遺物 ③ (須恵器鑿 縮尺1/6)

**馬 具** 海に金銅板をはった鞍金具(鞍A)の全容がほぼ明らかになり、鞍の規格と海の金具の紋様は、ほぼ正確に示せたと考える。さらに、鞍Aと辻金具、そして素環帯と心葉形杏葉が銛付いていることを再確認し、組合せの手がかりをえた。これによって、次の2組(板にA・Bとする)に復元する。

A組：鞍A、f字形鏡板付帯、剣菱形杏葉、四脚半球形辻金具、十字形辻金具、無脚雲珠(環状雲珠)

B組：鞍B、素環帯、鉄製心葉形杏葉、六脚雲珠、十字形辻金具

鉄具はその各々がどちらに組むかまではわからない。組合式の十字形辻金具は、長方形金具が3点、正方形金具が6点ある。これらに滅失したものもなく、鉢部をもった辻金具2がA組の面繋になる、

との前提にたてば、長方形金具3点はA組の剣菱形杏葉の枚数にあうので、正方形金具はB組の尻弊に4個と面弊に2個、との振り分けも、想定できる。

島根県内では、馬具の複数のセットが完全に残る資料が少ない。上島古墳は金銅装馬具一式の優品に加え、素環轡をセットにもの点でも貴重である。

須恵器 上島古墳の須恵器については、山本先生が「山本編年」第Ⅱ期に位置づけ、「これは第Ⅲ期に近い特徴をもつものである」と述べられた（山本1960）以外、ほとんど言及されたことがない<sup>25)</sup>。そして、從来、家形石棺から出土した蓋杯しか問題とされてこなかったが、上島古墳の須恵器の全貌は、かなり多彩である。

なかでも注目されるのは高杯だ。本稿では、高杯を、有蓋高杯A・B・C、無蓋高杯A・Bに分類した。このうち、有蓋高杯A・Bと無蓋高杯Bは、脚部の透かしが三角形2段の千鳥配置となる。また、無蓋高杯Aは、長方形2段の一列配置である。ほかに、蓋の有無不明の脚部があり、その透かしは、2段三方にあいて、三角形と長方形があり、配置も千鳥と一列とがある。これらすべてが同時期の資料かは別に検討が必要だが、10個体以上ある有蓋高杯A、および、それと杯部や透かしの形態がほぼ同じ有蓋高杯B、有蓋高杯Bと胎土および透かしの近似する無蓋高杯Bについては、同時期の資料ととらえておきたい。さらに、有蓋高杯Aと胎土・焼成の近似する無蓋高杯Aと口径の大きい有蓋高杯C（蓋のみ）も、時期差のあるものではなかろう。

このような高杯は、これまで県内ではほとんど知られていない。有蓋高杯Aは、大谷氏が「F型」とした松江市伝宇牟加比比売命御陵古墳例（金山・瀬古1993、19頁第16図、大谷1994）のように、脚端部がS字形に屈曲する。しかし、伝宇牟加比比賣命御陵古墳例は1段透かしで脚端部外面に波状紋をもち、ともなう蓋にはつまみが付くらしい、など、相違点も多い。

また、三角形透かしを千鳥に配置する2段透かしの例（大谷氏「B型」）には、安来市高広遺跡I区1号横穴墓（足立・丹羽野1984）や松江市八雲町宮内横穴墓（東森編1978）、松江市宍道町鎌崎古墳群1号横穴墓（広江ほか2002）がある。いずれの脚端部も、上下あるいは下方にわずかに拡張されているだけで、上島古墳の有蓋高杯Aのように屈曲するものはみあたらない。さらに、上島古墳の有蓋高杯は有蓋高杯A・Bとも、蓋につまみがともなわない<sup>26)</sup>。

越（第15図3）は、口縁部が大きく開く（大谷氏のB1型。大谷1994）。松江市鹿島町白畠古墳（大谷1994）例が近似する<sup>27)</sup>ものの、出雲地域の越とは形態が違い、むしろ畿内の須恵器に近似する。把手付椀（第15図1・2）や、胸部腹面に波状紋をいたたいた提瓶（第15図4）なども類例に乏しい。

以上、上島古墳の須恵器群は、これまで出土している出雲地域の須恵器とはかなり違った器種と形態をそなえている。おそらく、これらは東部出雲の大井古窯跡群（松江市）の製品ではなく、西部出雲の須恵器窯のものであろう。山本編年第Ⅱ期の窯としては、出雲市（旧平田市）本庄町深谷窯跡群がわかれているだけだが（柳浦1986）、その実態も含め、検討すべきだろう。

上島古墳は、副葬品の豊富さとその一括性の高さ、そして近隣に例のない剝抜式家形石棺など、出雲地域の後期初頭の古墳としてきわめて貴重だ。その発見からおよそ60年、あらためて、西部出雲の後期古墳資料として注目したい。

## 付 記

須恵器の実測図は大半が、文化財課の勝部真紀、櫻井康行、高橋亜紀、高橋智也による。その他の出土品は、花谷が実測した。遺物写真は、杉本和樹氏(奈良文化財研究所)の撮影による。また、図面の淨書には飯國陽子、水田節子、中島和恵の助力をえた。

本稿作成にあたり、いろいろな方々のお世話をいたしました。記して、感謝します(敬称略)。

渡邊貞幸、大橋泰大、山田康弘(鳥根大学)、牛嶋 茂、杉本和樹(奈良文化財研究所)、松本岩雄(鳥根県古代文化センター)、ト部吉博、広江耕史、神柱靖彦、澤田正明(鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター)、守岡利栄(鳥根県立古代出雲歴史博物館)、本間恵美子、高屋茂男(鳥根県立八雲立つ風土記の丘資料館)、大谷見二(鳥根県立松江北高等学校)、原 俊二(出雲市役所平田支所)、アタゴ写真館、出雲市文化財課。

- 1) 大谷見二氏が松江北高校考古学部員と測量調査された。前方後円墳の可能性を検討するのが目的だったが、墳形を確定するには至っていない。占墳が円墳ならばその規模は直径21m、高さ6.5m、前方後円墳の場合は全長35mと推定している(松江北高考古学部・大谷2005)。
- 2) 「山本資料」としたものは、実測図原図と、和紙にトレースしてこよりで縫じ合わせてある図面。そして[山本用紙]と印字のある台紙に貼った銀拓影である。旧平田市教育委員会が複写保管していたトレース図面と拓影を参照した。「池田報告」の挿図は、この資料をもとにしている。

「山本資料」については、鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター広江耕史氏と神柱靖彦氏のお世話をいたった。

複写資料は、全部でA2サイズ18枚。そのリストを「池田報告」との対応とともに示す。

- 第一図 墳丘及附近実測図(1/200) <池田報告第1図>
- 第二図 石棺右室開閉位置図(1/20) <池田報告第2図>
- 第三図 石棺外表面実測図(1/10)
- 第四図 石棺断面図(1/10)
- 第五図 石室実測図(1/10) <池田報告第3図は以上3図面を合成>
- 第六図 石棺内遺物配置図(1/10) <池田報告第4図>
- 第七図 石棺内遺存左大脛骨(1/1) <池田報告になし>
- 第八図 石棺内出土遺物、其一(1/1) <池田報告第5図>
- 第九図 石棺内出土遺物、其二(1/1)【直刀、複写は2枚に分割】 <池田報告になし>
- 第十図 石棺内出土遺物、其三(1/1)【須恵器】 <池田報告第6図左下>
- 第十一図 石室内遺物配置図 <池田報告第7図>
- 第十二図 石室内出土遺物、其一(1/1)【鉄鎌】 <池田報告第8図左上>
- 第十三図 石室内出土遺物、其二(1/1)【f字形鏡板付香】 <池田報告第8図左中>
- 第十四図 石室内出土遺物、其三(1/1)【素環】 <池田報告第8図右中>
- 第十五図 石室内出土遺物、其四(1/1)【瑠璃・辻金具】 <池田報告第8図右下>
- 第十六図 石室内出土遺物、其五(1/1)【杏葉】 <池田報告第8図左下>
- 第十七図 石室内出土遺物、其六(1/1)【鍍金具ほか】 <池田報告第8図右上>
- 第十八図 墳丘出土品(1/1)【須恵器】 <池田報告第6図上>
- 第十九図 墳丘近傍地域出土品(1/1)【須恵器・十師器】 <池田報告第6図右下>

- 3) これらの写真(図版1)は、アタゴ写真館(出雲市平田町)が撮影されたもので、図版1-1・2の原板は今も所蔵されている。今回、アタゴ写真館から提供していただいた焼付を掲載した。図版1-3の原板はなかったので、出雲市文化財課が保管する複写焼付を掲載した。生きしい画像である。

「山本資料」によると、出土状況を記録した第六図石棺内遺物配置図に「遺物は五月六日に棺蓋を除きた時の実測であり、遺物は玉類、銀環、大形の刀は同日の実測であるが、それ以外の遺物の位置は五日に遺物を取り出した者の説明によって記入した。」と記してある。

山本先生たちが現地に到着した時には、石棺は再び蓋をしてあり、美多実氏がチェーンブロックで開けた。となるので(山本1995-163頁)、この写真を撮影したのは、発見直後とみてよい。

地元の人士による発掘ながら、カメラマンをよんで写真撮影をおこなっていた先見性は、驚嘆に値する。いずれ、その

- あたりの経緯も調べてみたい。
- 4) 当時、発掘に携わった人の言によると、眉毛も残っていたという（2006年12月6日、国富コミュニティセンターにて聴取）。話を聞いた時には、「眉唾もの」と思ったが、その後に発見当時の写真をみて納得した。確かに頭蓋骨の顔面に眉毛のような黒い物体が写っている。ただし、眉弓からは離れ、前頭結節にはりついでいるようなので、頭髪の一部の可能性が強いだろう。
- 5) 「山本資料」によって作図した。
- 6) 「池田報告」本文4頁には「合計9個」とあるが、第5図に(右腕附近)管玉6点と(左腕附近)管玉4点の計10点が掲載されており、(山本1995)も「(左腕に)めのう管玉四、[中略] (右腕に)めのう管玉六」とある。カッコ内は筆者。
- 7) 家形石棺出土かどうかは謎言でない。
- 8) 碎片が若干あって一緒に保管されている。大谷亮二氏によれば、上塙治築山古墳出土遺物のなかに同種の碎片があり、上鳥古墳のものが混入したのではないか、という。
- 9) 矢柄の漆膜は、島根大学に保管されていた。これは、大谷亮二氏と原俊二氏の教示による。
- 資料は、木箱（30×40×6 cm、「島根大学文理学部／2—29—1116」のラベル付）に保管され、「簸川郡国富村／上鳥古墳出土／矢箋漆片」の紙ラベルが付く。取り上げ時に漆膜を固定した石膏棒も一緒に保存されている。これがもとのいた合板（28×12.5×0.2cm）には「平田市上鳥古墳石室／矢箋漆片」とある。1955年の平田市市制開始以後に注記されたものである。
- 調査にあたって、島根大学渡邊貞幸教授、大橋泰夫教授、山田康弘助教授のお世話になった。
- 10) 類例からすると、軸部は鉄薄板の円筒に軸が貫通する構造らしいが、本例はX線透過程撮影をおこなっていないので、その点を確認できない。
- 11) 「宮代報告」(第8図)では、右側の鍍金具と済浜金具を一本の鍍金具がつないでいるように作図されているが、ここは破断している(大谷1996)。現状もそうだ。
- 12) 同じようなやり方は、奈良県藤ノ木古墳の金銅製鍍金具にもある。
- 13) 鍍Bの軸は、欠けていた刺金が接合したほか、接合破片が別の部品だったので修正した。
- 14) 「出代報告」で遊離して表現されていた破片が接合した。
- 15) 大谷氏はこれを「麻泥金具」とみた。古墳時代の隙泥は、藤ノ木古墳例(櫻原孝古学研究所編1990)がある。その大きさは、左右80×上下53.5cmあり、革製の本体に鍍錫と平鉢を漆で貼り合わせ、四面に金銅製透彫紋様板と腹輪あるいは鍍金具をとめてある。これを下げる金銅製円形座金具付鉢具は、座金具周辺の4本の鉢で隙泥に留めてあった。報告書には鍍脚が折れているとするが、もとは鍍脚を隙泥に通し、裏面でワッシャを嵌めたのち、かしめて留めてあったであろう。鍍具も大きくして頑丈なことは、上塙治築山古墳の例とも共通する。その点、上鳥古墳の鉄製心葉形金具(杏葉)は懸垂金具が奢者である。また、皮革質のものへの固定方法も簡便で、裏面にあった皮革製品が小型だったことを思わせる。たしかに、隙泥に鍍具付心葉形懸垂金具が付く例はあり(韓國・慶州市天馬塚古墳例)、検討の余地がまったくないわけではない。だが、後述する六脚雲珠の存在からは杏葉とするのがよいと考える。
- 16) 草帯を交差させる時、一方の革帶の側面に草幅の切り込みを入れ、そこにもう一方の革帯を通して帯のずれを防止する方法もある(福井県十津ノ森古墳例)が、本例では単純に2条を重ねているようである。
- 17) 出土地点についてもう少し詳しい記述がある。「山本資料」第十八図(大型窓口縁部)に、「B点(家形石棺の北3m)からも似たものが出上したというので、口辺部だけを示す。もと略々完全形に復原出来るほどの破片があったが散逸した。此の堀は第一図(埴丘図、池田報告第1図)A点(家形石棺の北5m)から出土したという。」との註がある(カッコ内は筆者)。また、「山本資料」第十九図(把手付腕など)に註して、「この図は、第一図(埴丘図、筆者註)に示すC、D、E、等の地域から開墾の際、相当多量出土した破片の中の一部分について復原図示したものである。」とある。C-Eとは、それぞれ家形石棺の西7~8m(C)、南南西15m(D)、南10m(E)の地域をさす。個々の土器の出土地点はわからない。
- 18) この資料の存在は、文化財課景山真二氏と原俊二氏の教示によって知った。
- 19) 一部の破片には「上ヶ鳥」あるいは「上ヶ鳥古墳」の注記があるが、ほとんどの資料には出土地の記録はなかった。しかし、今回、分類整理をおこなったところ、上鳥古墳奉賛会で保管されてきた資料と接合したものがあったので、上鳥古墳出土品と認定した。
- 20) 「池田報告」第6図右下(「山本資料」第十九図)にある脚部、そして蓋および杯身と復元図示された資料は、本稿でいう有蓋高杯Aである。
- 21) つまみの付かない蓋が多いが、確実に杯身と判断できるものが1点もなかつたので、それらをすべて有蓋高杯の蓋と認めて報告する。
- 22) 提瓶の部分名称等は、(大谷1994・1996)にならう。
- 23) 「山本資料」第十九図(「池田報告」第6図)に嵌の肩部と復元されているのは、この個体の破片の一部であろう。

- 24) 「山本資料」第十八回の大型兜がこれに似るが、復元径は45cmとなっている。
- 25) 大谷見二氏も、その論文(大谷1994)の主題が「山本編年」第Ⅲ期の編分にあったためか、木占墳須恵器の過半が未報告だったためか、上島古墳の須恵器にはまったくくふれることができなかった。
- 26) 現在、出雲市文化財課で調査中の葵山遺跡で発見された円墳群からは、蓋につまみのない有蓋高杯がまとまってみつかっている。
- 27) 現在調査中の、出雲市国富町中村1号墳でもみつかっている。

#### 参考文献

- 池山満雄 1954 「出雲上島古墳調査報告」「古代学研究」10号、古代学協会、1~8頁。
- 大谷見二 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」「鳥根考古学会誌」第11集、鳥根考古学会、39~82頁。
- 大谷見二 1996 「御崎山古墳の研究」八重立つ風土記の丘研究紀要Ⅲ、鳥根県教育委員会・鳥根県立八重立つ風土記の丘。
- 大谷見二編 1996 「黄金に魅せられた倭人たち」鳥根県立八重立つ風土記の丘資料館。
- 大和久義平 1974 「七面り鏡塚古墳」、帝國地方行政学会。
- 櫻原考古学研究所 1990 「斑鳩 藤ノ木古墳 第一次調査報告書」。
- 金山正樹・瀬古誠子 1993 「伝宇牟加比比充命御成古墳」松江市文化財調査報告書、松江市教育委員会。
- 鳥根県教育委員会 1963 「鳥根の文化財」第3集。
- 杉本秀宏 1988 「古墳時代の鐵鏃について」「櫻原考古学研究所論集第8」吉川弘文館、529~644頁。
- 大社町 2002 「大社町史」史料編(民俗・考古資料)。
- 花谷 浩 1986 「素環鏡板付銅の編年とその性格」「山陰考古学の諸問題」山本 清先生喜寿記念論文集、同刊行会、239~276頁。
- 原 喜久子 1993 「鳥根県における古墳時代の鉄鏃について」「鳥根考古学会誌」第10集、鳥根考古学会、39~67頁。
- 東森市良輔 1978 「八重村の遺跡 八重村埋蔵文化財分布調査報告書」八重村教育委員会。
- 広江耕史ほか 2002 「屋敷古墳群・鶴崎古墳群・足頭古墳群・長廻古墳群・杓子鍾音1古墳群・杓子鍾音1遺跡」宍道インター線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、鳥根県教育委員会。
- 松江北高校考古学部・  
大谷見二 2005 「上島古墳測量測定報告」「鳥根考古学会誌」第22集、鳥根考古学会、75~84頁。
- 松本岩雄編 1999 「上塙治築山古墳の研究」鳥根県古代文化センター調査研究報告書4、鳥根県教育委員会・鳥根県古代文化センター。
- 宮代栄一 1997 「鳥根県上島古墳出土馬具の再検討—古墳時代の銅金具の多変量解析—」「鳥根考古学会誌」第14集、鳥根考古学会、61~89頁。
- 森下章司 1991 「古墳時代後製鏡の変遷とその特質」「史林」第74巻6号、史学研究会。
- 森下章司 2002 「古墳時代後鏡」「考古資料大観」第5巻 陈生・古墳時代 鏡、小学館、305~316頁。
- 柳浦俊一 1986 「出雲地方の須恵器牛座」「山陰考古学の諸問題」山本 清先生喜寿記念論文集、同刊行会、423~445頁。
- 山本清・池田満雄 1969 「平田市域の歴史 原始・古代」「平田市史」、55~100頁。
- 山本 清 1957 「浜田市めぐら古墳遺物について」「鳥根大学論集(人文科学)」(『山陰古墳文化の研究』山本清先生退官記念論文集刊行会、249~271頁、1971年、に再録)。
- 山本 清 1960 「山陰の須恵器」「鳥根大学開学10周年記念論集」(『山陰古墳文化の研究』山本清先生退官記念論文集刊行会、315~340頁、1971年、に再録)。
- 山本 清 1995 「平田市上島古墳の調査」「古代出雲の考古学—遺跡と歩んだ70年—」ハーベスト出版、162~165頁。

第1表 鉄錠一覧表

押因番号	図番号	全長	現存長	刃部長	錐身長	茎長	現重量	矢柄径	茎の機械	備考
第5図	1	21.7		3.7	13.0	8.7	18.9	0.9	○	
	2		20.5	3.6	13.0		20.2	0.9	×	
	3	21.5		3.7	13.0	8.5	25.1	0.85	○	
	4	19.6		4.0	13.1	6.6	20.3	0.9	○	
	5	23.2		3.6	[12.6]	8.6	24.1		○	
	6		21.8	3.8	13.2			0.85	○	
	7	20.0			13.2	6.8	50.3	0.85	×	固着
	8		4.1						×	
	9		14.6			7.2			○	
	10	20.7		3.6	12.9	7.8	37.0	0.8	○	固着
	11	22.1		4.0	13.0	9.1		0.85	○	固着
	12		22	3.0	[12.6]			0.85	○	固着
	13		19.9	3.5	13.0		20.4	0.9	○	
	14		18.8	3.5	[13.3]		19.4	0.9	×	
	15		17.5		13.0		19.8	0.85	○	
	16		16.8	4.0	12.9		19.1	0.95	×	
	17		16.4		12.9		20.3	0.9	○	
	18		6.8	3.0			9.9		×	
	19		6.2				19.5	0.8	×	
	20		15					0.9	×	固着
	21		11.4				33.8	0.9	×	
	22		19.3	3.0				0.9	○	固着
	23		17.2			8.8	16.4	0.9	○	
	24		7.3				6.3		×	
	25		4.9				3.9		×	
	26		3.7				4.7	0.85	×	
第6図	27		19.1		13.0			0.8	×	
	28	22.2			13.1	9.1			○	
	29		21.0	3.8	12.9			0.8	×	固着
	30		19.4	3.7	13.0				○	
	31		16.8			8.8		0.85	○	
	32		21.3		[13.4]			0.85	○	
	33		20.8		13.2				○	
	34	21.5			13.1	8.4			×	固着
	35		20.3		13.0				○	(21-31とも固着)
	36		20.0		13.0			0.85	○	
	37	22.5			13.4	9.1		0.9	○	
	38		9.6	3.9					×	
	39		19.8	3.6	12.9				○	
	40	21.3			12.8	8.5			○	
	41	21.4			13.3	8.1		0.9	○	
	42	21.5			13.0	8.5			○	
	43		11.8						○	
	44		21.5	3.8	12.9			0.8	○	
	45	20.9		3.8	13.1	7.8			○	
	46	20.9			[12.5]			0.9	○	
	47			4.8	13.1	8.9			0.8	○
	48	22.2			13.0	9.2			0.9	○
	49	21.2		3.7	13.0	8.2			0.9	○
	50	21.9		3.3	13.1	8.8			0.85	○
	51		16.7		13.2				0.85	○

錐身長 [ ] は推定

長さと径の単位：cm、重量の単位：g

第2表 須恵器観察表

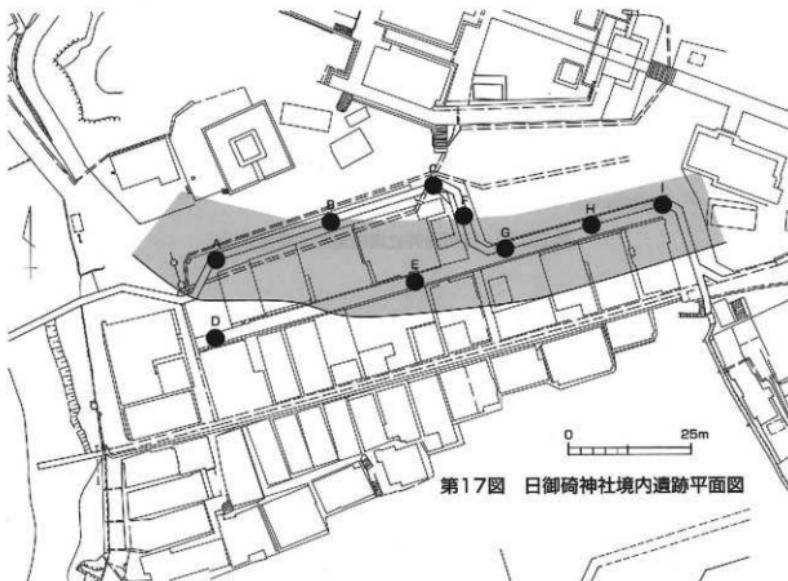
須恵器番号	図番号	器種	形態・技術の特徴	法尺(cm)			胎土・焼成	資料
				口径[受 部径]	底盤・ 脚径	器高 [脚高]		
第4回	41	杯身	口縁端部まるくおさめる。天井部回転ヘタケズリ(左回り)。	12.3 (14.8)		4.2	胎土精良。硬質。	奉贊会資料・東形右衛門出土
第14回	1	有蓋高杯A蓋	口縁端部さじ面。天井部回転ヘタケズリ(左回り)。	14.4		4.2	胎土精良。硬質。	大谷資料6片 接合
	2	有蓋高杯A	杯部端部内面、浅い円錐状の段。杯部外兩、旋転ヘタケズリ。脚部の透は、三角形二段3方向、千鳥配置。	12.4 (15.3)	11.6 (8.2)	12.6 (8.2)	胎土精良。硬質。	大谷資料6片 接合
	3	有蓋高杯A蓋	口縁端部さじ面。天井部回転ヘタケズリ(左回り)。	13.6		4.6	胎土精良。硬質。	大谷資料4片
	4	有蓋高杯A	杯部端面に凹線なし。脚部の透は、三角形二段3方向、千鳥配置。	10.9 (13.5)		13.7	胎土精良。硬質。	大谷資料3片
	5	有蓋高杯A蓋	口縁端部に深い段。天井部回転ヘタケズリ(左回り)。	14.2		4.2	胎土精良。硬質。	大谷資料2片
	6	有蓋高杯A	杯部端面内面に浅い凹線。杯部外兩、回転ヘタケズリ。脚部の透は、三角形二段3方向、千鳥配置。	11.8 (13.5)		14.3	胎土精良。硬質。	大谷資料4片
	7	有蓋高杯A蓋	天井部回転ヘタケズリ(左回り)。				胎土精良。硬質。	大谷資料
	8	有蓋高杯A蓋	天井部回転ヘタケズリ(左回り)。				胎土精良。硬質。	大谷資料
	9	有蓋高杯A蓋	口縁端部浅い段。	14.1		4.2	胎土精良。硬質。	大谷資料
	10	有蓋高杯A蓋	口縁端部後(後)段。				胎土精良。硬質。	大谷資料
	11	有蓋高杯A蓋	口縁端部さじ面。				胎土精良。硬質。	大谷資料
第15回	12	有蓋高杯A	杯部端面に凹線なし。	12.6 (15.3)			胎土精良。硬質。	大谷資料3片
	13	有蓋高杯A	杯部端面に凹線なし。	11.6 (14.4)			胎土精良。硬質。	大谷資料
	14	有蓋高杯A	三角形透は上下千鳥配置。	13.8	112.0		胎土精良。硬質。	大谷資料
	15	有蓋高杯B蓋	口縁端部さじ面。天井部回転ヘタケズリ(左回り)。			4.4	胎土粗。硬質。	大谷資料4片 +奉贊会資料
	16	有蓋高杯B	杯部端面に凹線なし。杯部外兩カキ目。再邊は前曲せず。	11.6 (13.8)	112.8	13	胎土粗。硬質。	大谷資料4片
	17	有蓋高杯C蓋	天井部回転ヘタケズリ(左回り)。				胎土粗。硬質。	大谷資料
	18	有蓋高杯C蓋	つまみ付。大型。口縁端部さじ面	16.4		6.3	胎土良、クサリ	大谷資料3片 + 奉贊会資料
	19	無蓋高杯A	浅い直壁の杯部。口縁部は大きく外反。房部は継長い。透は長方形、二段3方向。脚部内面しづら目。	14.1	16.5	1.5	頗多。やや軟質。	大谷資料3片
	20	無蓋高杯B	杯部外側に彫刻立直紋。透は三角形、二段3方向の千鳥配置。				胎土精良。硬質。	大谷資料2片
	21	無蓋高杯B	透は三角形、二段3方向の千鳥配置。				胎土粗。硬質。	大谷資料
第15回	22	高杯	透は三角形、二段3方向の千鳥配置。脚部内面しづら目。				胎土粗。硬質。	奉贊会資料
	23	小形高杯	透は長方形、一段3方向。	[9.0]			胎土粗。硬質。	大谷資料
	24	高杯	透は長方形、二段3方向丁字形配置。脚部内面しづら目。				胎土粗。硬質。	大谷資料3片 + 奉贊会資料
	1	把手付椀	口縁下部に凸筋。脚部に波状紋。	10.2			胎土粗。硬質。	奉贊会資料
	2	把手付椀	口縁は直立。脚部に波状紋。底部カキ目調整。	10.0			胎土や今粗。や硬質。	大谷資料 + 奉贊会資料
	3	匙	口縁部は大きく外反。	16.0			胎土精良。硬質。	大谷資料2片
	4	提瓶	腹面に波状紋。縦口。鉤形の把手。				胎土精良。硬質。	大谷資料
第15回	5	提瓶	脚部はレンズ形。細口。鉤形の把手。広口。	7.8	21		胎土精良。硬質。	大谷資料 + 奉贊会資料
	6	提瓶	広口。若狭燒窯。罐状把手。	15.6	20.8		胎土精良。硬質。	大谷資料
	7	提瓶	細口。原状把手。				胎土精良。硬質。	大谷資料

第 15 回	8	提瓶	細口。環状把手。			胎土精良。硬質。	大谷資料
	9	広口瓶	頸部長い。頸部カキ目調整。	15.1		胎土やや粗。硬質。	大谷資料 + 春葉会資料
	10	広口壺	腹部深い。	22.0		胎土精良。硬質。	大谷資料
	11	広口壺	頸部やや短い。	22.0		胎土精良。硬質。	大谷資料
	12	有蓋短縦巻	把手付き。口部カキ目調整。	測定 4.25		胎土精良。硬質。	大谷資料
第 16 回	1	甕	頸部を 3 段に区画、波状紋 2 段。肩部と口頸部は接合式。	40.4		胎土精良。硬質。	大谷資料 + 春葉会資料
	2	甕	頸部を 3 段に区画、波状紋 2 段。肩部と口頸部は接合式。	42.0		胎土精良。硬質。	大谷資料
	3	甕	頸部を 4 段に区画、波状紋 3 段。口頸部をカキ目調整。	測定 46		胎土精良。硬質。	大谷資料
	4	甕	口縁部が強く外反。口頸部をカキ目調整。	43.0		胎土精良。硬質。	大谷資料
	5	甕	頸部を 3 段に区画、波状紋 2 段。			胎土精良。硬質。	大谷資料
	6	甕	頸部を 3 段に区画か。波状紋 2 段か。			胎土精良。硬質。	大谷資料
	7	甕	口頸部をカキ目調整。			胎土精良。硬質。	大谷資料
	8	甕	頸部を 4 段に区画、波状紋 3 段か。口縁部をカキ目調整。			胎土精良。硬質。	大谷資料
	9	甕	口頸部をカキ目調整。			胎土精良。硬質。	大谷資料

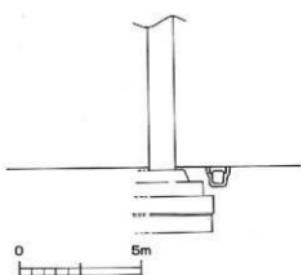
## II. 日御崎神社境内遺跡の調査

### 1. 日御崎神社について

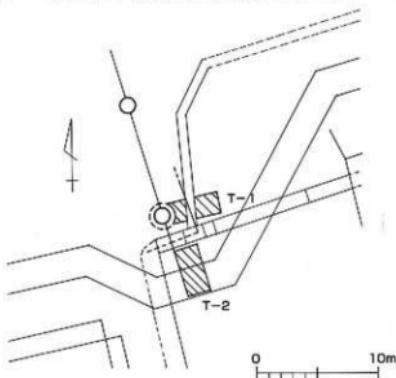
日御崎神社は島根半島の西端に所在し、神の宮に素盞鳴尊を、日沈宮に天照大御神を祀っている。社伝によれば、神の宮が隱ヶ丘、日沈宮が経島に鎮座していたとされていることから、それぞれ『出雲国風土記』に記載される美佐伎社と百枝橿社と考えられている。その後、現社地への遷座を経て、現在の社殿はとともに三代將軍徳川家光の命により造営された。昭和28年には社殿や境内の石造建築物などが国指定重要文化財に指定されている。



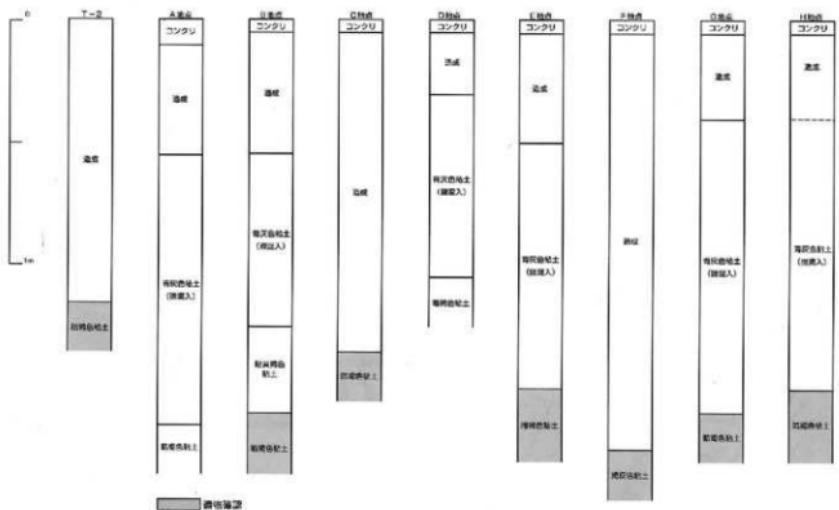
第17図 日御崎神社境内遺跡平面図



第18図 石造鳥居立面図



第19図 石造鳥居平面図



第20図 日御碕神社境内遺跡土層柱状図

## 2. 調査の経緯

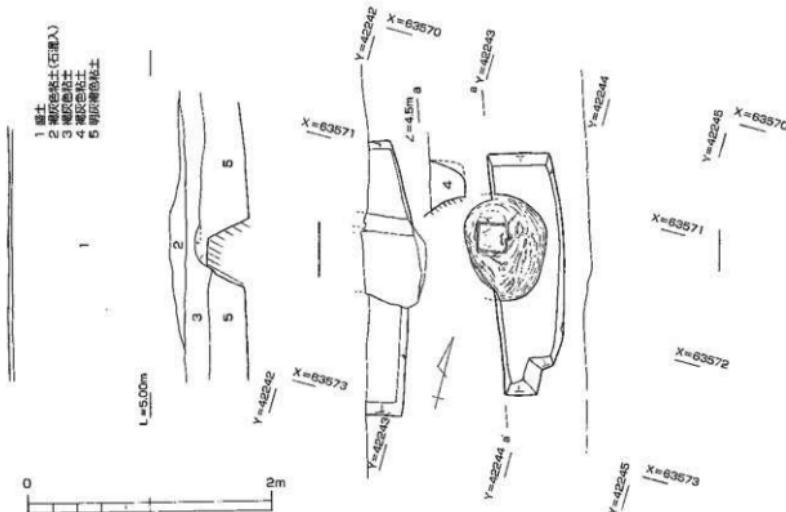
出雲市文化財課は市下水道建設課が計画する字竜地区漁業集落排水整備事業について、埋蔵文化財の事前調査の依頼を受けた。当地は周知の遺跡である日御碕神社境内遺跡の範囲内であったが、排水路の計画幅が狭く遺跡が確認されても発掘調査は難しい状況であったことから、路線の大部分を試掘・工事立会とした。なお、重要文化財に指定されている鳥居周辺の排水路については、鳥居の下部構造を破壊する可能性も想定されたことから、試掘調査を実施し、調査結果を踏まえて再度協議することとなった。調査は平成18年11月13日から平成19年1月5日まで隨時行った。

## 3. 調査の概要

調査は排水路部分を試掘・工事立会にて実施した。調査の結果、神社社殿から遠いD地点には全く遺物がなく、E地点でも少量の遺物が出土するのみであったが、社殿に近いB・C・F～I地点からは遺物が比較的多く出土している。

重要文化財に指定されている鳥居(花崗岩製)周辺では、隣接地に排水路が計画された。鳥居の歪みが著しく倒壊の危険性もあったため、鳥居を保護するためのコンクリ柱補強が計画されたが、コンクリ柱が鳥居の下部構造に影響を与える可能性も想定されたため試掘調査を行うことになった。調査は鳥居の神社側にトレンチを設定し(T-1)、手掘り及び重機掘削によって序々に掘削しながら遺構・遺物の有無を確認した。

調査の結果、盛土層下に高さ35cmの石製(玄武岩?)の基礎を2段に据えていることが確認された(第18図、図版5-4～7)。なお、盛土層約30cmの中の構造は鳥居倒壊の危険が想定されたため



第21図 F地点検出礫石実測図

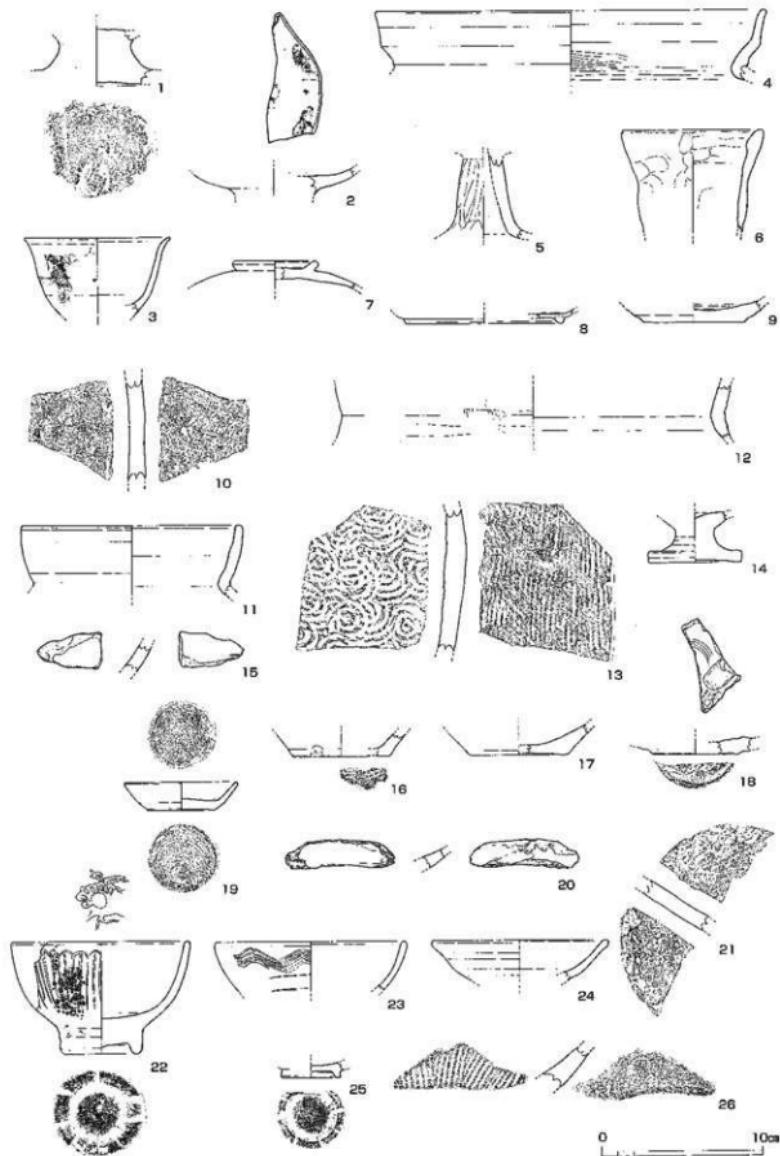
調査できなかった。2段の基礎の間には鳥居外側で約2~3cm、鳥居内側で約7~8cmの隙間があり、王砂利を挟んでいる。上段の石材は下段の石材より4cm東側に伸びて段を為し、石材の軸方向は鳥居の裾部を結ぶラインと若干の違いが確認できた。しかし湧水が激しく鳥居倒壊の危険が想定されたことから、基礎石材の広がりや石材の下部構造は確認することができなかった。そこで鳥居外側にさらにトレーニングを設定し(T-2)、基礎石材の広がりを確認した。基礎石材は確認されなかったものの、30~40cm大の石が詰め込まれているのが確認され、鳥居の基礎に関連する施設と考えられた。遺物は出土層位が明確でないものの、T-2より柱状高台が出土している。

協議の結果、現状の計画では鳥居の下部構造を破壊する可能性が想定されたため、文化財建造物保存技術協会の高村氏の調査指導のもと、排水路を下部構造に影響を与えない程度南側に路線変更し、さらにコンクリート柱で補強工事を行うことで、鳥居の下部構造の現状保存措置を探った。

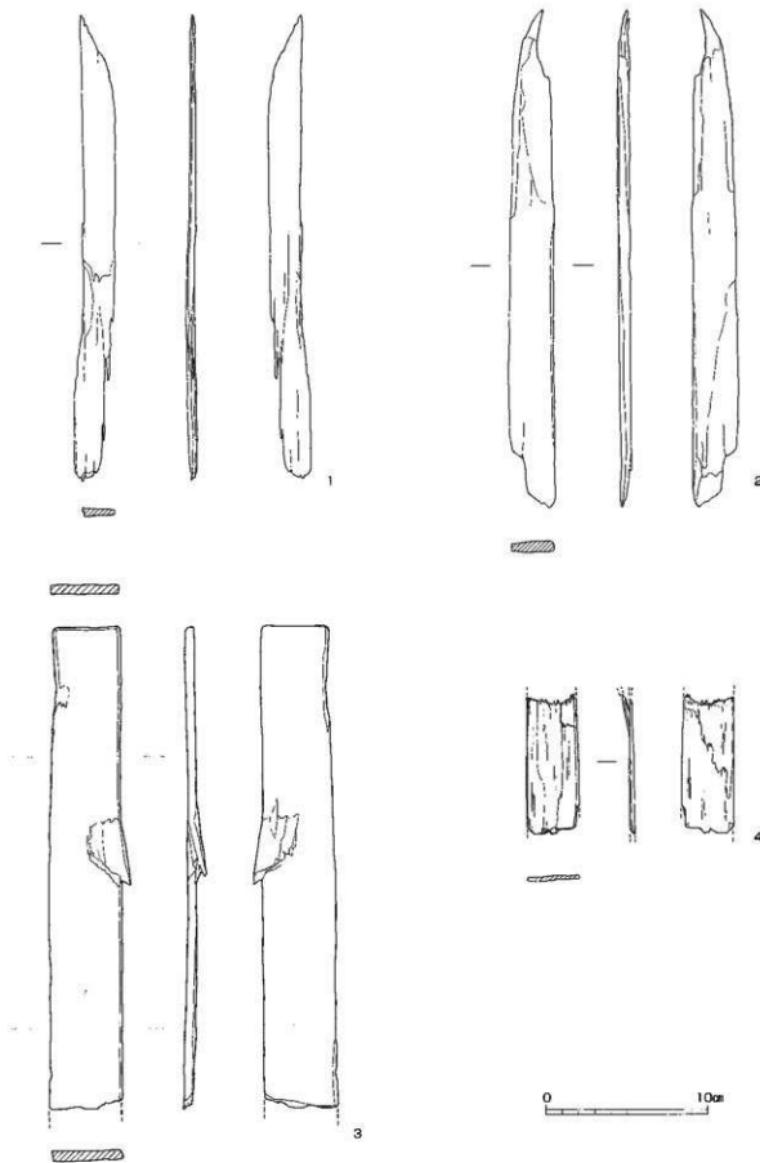
第21図はF地点で検出した礫石である(図版6-2~5)。縦長86cm以上、横長67cm以上、高さ40cm以上を測り、天井部には南北24cm、東西25cmのほぼ正方形形状の割り込みが施されている。湧水により礫石の掘り形は不明確で、北側では土層の落ち込みが確認できるものの、南側では確認できなかった。なお、トレーニングの底から其盤面を確認している。遺物は北側落ち込みから18世紀の染付が出土している。

#### 4. 出土遺物(第22、23図、図版8)

**鳥居下出土遺物**(第22図1、図版8) 1は鳥居下から出土した土師質土器柱状高台で、脚部は外反しながら広がる。器部は欠損している。脚部外面に回転ナデ調整を施し、底部に回転糸切後板目を残す。



第22図 日御崎神社境内遺跡出土遺物 1



第23図 日御崎神社境内遺跡出土遺物 2

**B地点出土遺物** (第22図4~10, 図版8) 4は弥生土器甕の口縁部で、内外面ともにナデ調整を施す。一方、肩部内面は風化が著しいものの、ヘラケズリ調整を施している可能性がある。頸部内面にはハケ目調整が施されている。5は土師器高坏。脚部の広がりは外方に直線的で、裾部で屈曲して外方に広がる。内面は風化が著しいが、外面にはヘラミガキ調整が施されている。6は製塙土器。口縁部は器部中程で外傾した後、外方に直線的に立ち上がり、端部は肥厚させて丸く仕上げている。内外面にナデ調整及び指頭圧痕が残る。7, 8は須恵器である。7は輪状つまみの蓋で、器壁は内湾気味に広がる。内面は回転ナデ調整後ナデ調整を施し、外面は回転ヘラケズリ調整後輪状摘みを貼付し、回転ナデ調整している。8は坏の高台で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。高台は貼付高台である。胎上は還元焼成が充分でなく軟質である。9は土師質土器で、器壁は外方に直線的に立ち上がる。風化が著しいが内外面ともに回転ナデ調整を施しているものと考えられる。底部は風化のため調整不明である。10は盃器系陶器の壺片で、内外面にナデ調整を施す。

**C地点出土遺物** (第22図11~13, 16~18, 図版8) 11, 12は土師器である。11は壺の口縁部で、口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部を平坦にしている。内外面にナデ調整を施し、肩部内面にヘラケズリ調整を施す。12は甕の頸部で、器壁は外方に直線的に立ち上がる。口縁部内面にナデ調整、肩部内面にヘラケズリ調整、頸部外面にナデ調整後一部にハケ目調整を残す。13は須恵器甕で、内面に青海波文、外面に平行タタキが施されている。16, 17は土師質土器坏で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。16は底部に回転糾切痕を残し、外面に粘土塊が付着している。17の底部は風化が著しく調整不明である。18は瀬戸の灰釉陶器で、底部を削り出し後内外面に施釉している。表面には貫入が入る。内面見込み及び底部に胎上日積の融着痕が残る。

**B地点～C地点間出土遺物** (第22図14, 15, 図版8) 14は土師質土器柱状高台で、脚部は裾部で外反しながら広がり、端部に平坦面を作っている。風化が著しく底部の調整は不明であるが、器部内面見込みにナデ調整を施し、脚部外面に回転ナデ調整を施す。15は赤彩土器で、内外面ともに赤彩を施している。外面にはハケ目調整が施されている。

**E地点出土遺物** (第22図19, 図版8) 19は土師質土器小皿で、口縁部の立ち上がりは外方に直線的で、端部には平坦面を作っている。内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部に回転糾切痕を残す。

**F地点出土遺物** (第22図2, 3, 20, 図版8) 2, 3は礎石周辺落込から出土した染付である。2は皿で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。内面見込みに染付し内外面に施釉している。3は碗で、口縁部は外方に直線的に立ち上がった後外反し、端部は丸く仕上げている。外面に染付し内外面に施釉している。表面には貫入が入る。外面に漆が付着している。20は漆器碗で、内外面ともに漆が施されている。

**G地点出土遺物** (第22図21, 図版8) 21は盃器系陶器の壺片で、内外面ともにナデ調整している。肩部外面に灰が付着している。

**G地点～H地点出土遺物** (第22図22, 23, 図版8) 22は青磁碗で、口縁部は内湾しながら立ち上がり内湾気味となる。端部は丸く仕上げている。外面に線状に形骸化した錦薙介、内面見込みに菊花文を陰刻し、内外面ともに施釉する。釉薙には貫入が入る。高台見込は釉ハギし露胎としている。器部外面には漆が付着する。23は白磁で、口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部は丸く仕上げている。外面に4条の波状文を陰刻し、内外面を施釉している。

H地点出土遺物 (第22図24、図版8) 24は唐津焼窯で、口縁部は内湾気味に立ち上がった後外傾気味となり、端部を丸く仕上げている。内外面ともに施釉している。

盛土出土遺物 (第22図25、図版8) 25は盛土に混入していた瀬戸灰釉陶器で、内面見込は施釉し表面に貫入が入る。底部外面は露胎で、同軸ヘラケズリ調整を施し、高台貼付後回転ナデ調整している。

出土地不明遺物 (第22図26、図版8) 26は在地の擂鉢と考えられる。内面には擂目、外面には同軸ヘラケズリ調整が施されている。

F地点出土木製品 (第23図1~4、図版8) 用途不明の板材である。

## 5. 考察

### ①鳥居（国指定重要文化財）の下部構造について

寛永21年（1644）の『出雲日御碕社図』には、今回調査を実施した鳥居（国指定重要文化財）と同位置に鳥居が記載されており、当鳥居の起源は三代将軍徳川家光の治世まで遡ることができる。当鳥居の下部構造は2段の基礎で構築されており、周囲には30~40cm大のグリ石が詰められていた。鳥居の発掘調査例が少ないため、他事例との比較は難しいが、『山雲日御碕社図』や文化10年（1813）の『日御碕社分間懸地絵図』（図版4）には、鳥居東側に神撰印が記載されており、軟弱な地盤上に鳥居を安定させるため、頑丈な下部構造が必要だったものと考えられる。

### ②礎石について

礎石北側に落ち込む層から18世紀の染付が出土している。しかし湧水が著しくこの落ち込みが掘り形であるかは確認できなかった。トレンチの底で基盤層を確認しており、時期が遡る可能性があるため、礎石の時期は18世紀以前と考えておく。

『日御碕社分間懸地絵図』では、礎石が確認された付近に人工池が見え、構築物として橋が記載されている（註1）。橋の礎石である可能性は考えられるが、礎石の割り込みが24cm×25cmと大きく、時期も遡る可能性があることから、橋でない可能性も考える必要がある。同様の縦り込み（一辺25cmの正方形状）を持つ礎石は、尾道遺跡（尾道市）でも確認されており（註2）、縦り込みに石柱最下部の破片が残存していたこと、付随する遺構が確認されなかつたことから道標・石碑が推定されている。

日御碕神社は南北朝末期まで杵築大社（出雲大社）の支配下にあり、社領は①極めて限定された範囲の境内と、②「三崎神田」と呼ばれる散在神田から成り立っていた。しかし室町・戦国初期には幕府・守護権力と結び境内の拡大と自立化を進めた結果、杵築大社との間に激しい境相論が繰り返されたことが文書で確認されている（註3）。

礎石の時期が遡ることになれば、杵築大社との関係を含めた文書の検討も必要であろう。

## 付記

試掘・工事立会については遠藤が行い、遺構の実測は花谷が行った。また遺物の実測については文化財課の勝部真紀、櫻井康行（以上臨時職員）が行い、遺構・遺物の sondage・整理は飯國陽子、遠藤恭子、中島和恵、今岡伸穂（以上室内作業員）が行った。遺構・遺物の写真は遠藤の撮影である。

本稿の作成にあたり、いろいろな方々のお世話になった。記して、感謝します（敬称略）。

高村功一（財團法人 文化財建造物保存技術協会 大阪支部）、野沢敏則（児島工務店）、小池英伊（開發社）、川瀬 満（出雲市役所下水道課設課）。

### （註）

（1）絵図での確認については、出雲市役所町史編さん室・吉野和史氏・山下和秀氏にご協力いただいた。

（2）宮本一詳編『尾道遺跡－久保一丁目地区幹線賃渠塗造工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－』尾道市教育委員会 2004年

（3）大社町史編纂委員会編『大社町史 上巻』1991年

## 出土遺物観察表(土器類)

番号	写真	出土地点	種別	器種	口径	底径	器高	手法の特徴	備考
22-1	図版8	T-1	土師質土器	柱状高台付环	-	-	-	内面：施點不明 外面：回転ナデ、回転糸切	底部に板目を残す
-2	"	F地点 礫石周辺落込	肥前系染付	皿	-	-	-	内面：施釉 外面：施釉	内面見込に染付
-3	"	F地点 礫石周辺落込	肥前系染付	碗	(9.1)	-	-	内面：施釉 外面：施釉	表面に落入る 外面に染付、漆付着
-4		B地点	弥生土器	甕	(24.0)	-	-	内面：ナデ、ハケ 外面：ナデ	複合口縁を呈す 底部内面へラケズリ？
-5		B地点	土師器	高坏	-	-	-	内面：施點不明 外面：ヘラミガキ	
-6		B地点	土師器	製造土器	(8.6)	-	-	内面：ナデ、指印压痕 外面：ナデ、指印压痕	
-7		B地点	須恵器	蓋	-	-	-	内面：回転ナデ、ナデ 外面：回転ヘラ、ナデ	輪状構み貼付
-8		B地点	須恵器	坏	-	(9.6)	-	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	貼付高台 運元開成が充分でなく軟質
-9		B地点	土師質土器	坏	-	(6.2)	-	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	底部調整不明
-10		B地点	壺器系陶器	甕	-	-	-	内面：ナデ 外面：ナデ	
-11		C地点	土師器	甕	(13.6)	-	-	内面：ナデ、ヘラケズリ 外面：ナデ	
-12		C地点	土師器	甕	-	-	-	内面：ナデ、ヘラケズリ 外面：ナデ、ハケ目	
-13		C地点	須恵器	蓋	-	-	-	内面：青海波文 外面：平行タタキ	
-14	図版8	B地点と C地点の間	土師質土器	柱状高 台付环	-	(5.6)	-	内面：ナデ 外面：施點回転ナデ	底部調整不明
-15		B地点と C地点の間	赤彩土器	不明	-	-	-	内面：施點不明 外面：ハケ目	内外面ともに赤彩
-16		C地点	土師質土器	坏	-	(6.0)	-	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、回転糸切	外面上に粘土付着
-17		C地点	土師質土器	坏	-	(6.0)	-	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	底部調整不明
-18	図版8	C地点	瀬戸灰釉陶器	皿	-	(5.4)	-	内面：施釉 外面：施釉	底厚削出、釉葉に落入る 内面見込及び底部に胎土 目積の歯着着
-19	"	E地点	土師質土器	小皿	(6.9)	4.2	1.8	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、回転糸切	
-20		F地点	漆器	碗	-	-	-	内面：	内外面ともに漆塗
-21		G地点	壺器系陶器	甕	-	-	-	内面：ナデ 外面：ナデ	底部外側に灰付着
-22	図版8	G地点と H地点の間	青磁	碗	(10.9)	4.5	(7.0)	内面：施釉 外面：施釉	外面上に彰化した模様 内面見込及び外側に施釉剝 内面見込に入れる 裏見込入り+半倒胎 施釉外側に漆付着
-23	"	G地点と H地点の間	白磁	碗	(11.7)	-	-	内面：施釉 外面：施釉	外面上に4条の波状捺剝
-24	"	H地点	肥前系陶器	壠	(10.8)	-	-	内面：施釉 外面：施釉、回転ヘラ、 回転ナデ	唐津焼
-25		造成土	瀬戸灰釉陶器	不明	-	3.6	-	内面：施釉 外面：回転ヘラ、回転ナデ	内面見込落入する 底部施釉
-26		出土地不明	在地土器	擂鉢	-	-	-	内面：回転ナデ 外面：回転ヘラ	内面に描目

## 出土遺物観察表(木製品)

番号	写真	出土地点	種別	器種	縦長	横幅	肥厚	備考
23-1		F地点	木製品	用途不明	(28.9)	(2.6)	0.6	
-2		F地点	木製品	用途不明	(31.0)	2.9	0.8	
-3		F地点	木製品	用途不明	(30.1)	4.6	0.5	
-4		F地点	木製品	用途不明	(8.7)	3.3	0.3	

### III. 鶯隧道の調査

#### 1. 周辺の歴史と環境

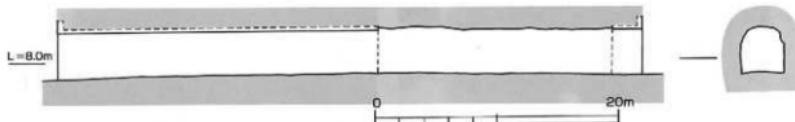
鶯隧道の所在する大社町鶯浦地区は古くは鉱山と港で栄えた。室町時代からあったとされる鶯銅山は石見銀山の先駆けを成した古い銅山である(昭和初期に閉山)。『銀山旧記』などによれば、大永6年(1526)に鶯銅山の山師三島清右衛門が博多の商人神屋寿禎と共同で大森銀山を開発したとある。また鶯浦は天然の良港で江戸後期から明治にかけて北前船の寄港地として栄え、船問屋・荷宿・船宿などが立ち並んだ。現在も輪島屋・北国屋・播磨屋・丹後屋・備前屋・大阪屋など北海道や北陸、関西諸国の船人にちなんだ屋号が多く残存している。一方、鶯銅山東方約1.1kmにある鶯崎鉱山(鶯崎地区)は一時は日本の銅の価格を左右するほどの銅を産出したとも言われ、昭和初期には石膏の鉱山として賑わった。



第24図 鶯隧道周辺図1



第25図 鶯隧道周辺図2



第26図 鶯隧道実測図

## 2. 調査の経緯

鷺隧道は昭和8年(1933)に鷺浦に掘削された機械素掘の隧道で、平成14年(2002)には島根県の近代化遺産として報告されている(1)。現況では鶴崎側(北側)に素掘部分が残り、鷺市街地側(南側)は崩落防止のためにコンクリートによる補強工事が行われているが、近年になり岩盤の崩落や補強部分の亀裂が頻繁に見られるようになった。隧道が小学生の通学路にもなっていることから、市道路河川維持課は小学校の夏休みに併せ、隧道を補強する鷺浦線災害防除工事を計画された。これにより素掘部分に残る加工痕の全てが覆われるため、緊急に踏査を実施し写真等記録を残しながら現況を確認した。

## 3. 調査の概要

鷺隧道は延長約44.4m、幅員約2.8mを測る。床面と鷺市街地側(南側)はアスファルト及びコンクリートで覆われているため、鶴崎側(北側)の天井部及び側壁に残る加工痕を中心に調査した。調査の結果、加工痕は軟弱な地盤を機械掘りにより掘削したものと考えられ、荒掘の加工痕が明確に残されている。鷺隧道の翌年(昭和9年)には同路線の鶴崎側に面坂隧道が掘削されているが、旧来の面坂隧道は車道幅員2.7m、高さ1.4mで、鷺隧道以上に軟弱な地盤を掘削した突貫的なものであったという(平成7年に延長130m、幅員5m、高さ4.5mの新トンネルに改修)。しかし両隧道は海岸部の鶴鳴地区と市街地を結ぶ重要な生活道路の一部として活躍しており、文化的には貴重な歴史遺産と考える。

### 付記

踏査については遠藤が行い、遠橋の写真撮影も遠藤が行った。また遠橋の添書は遠藤恭子(室内作業員)が行った。本稿の作成に当たり、いろいろな方々のお世話になった。記して感謝します(敬称略)。  
西尾克己(島根県教育庁文化財課)、杉森栄路(出雲市役所道路河川維持課)。

### <参考文献>

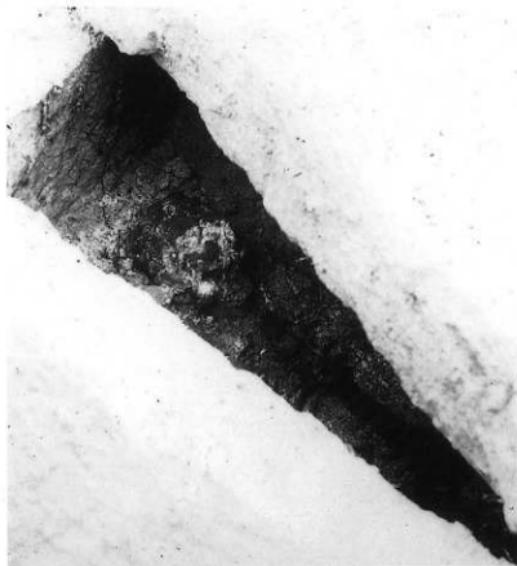
- (1) 島根県教育委員会『島根県の近代化遺産－島根県近代化遺産(建造物等)総合調査報告書－』2002
- (2) 大社町行政史料編集委員会『大社町行政史』2004



# 図 版



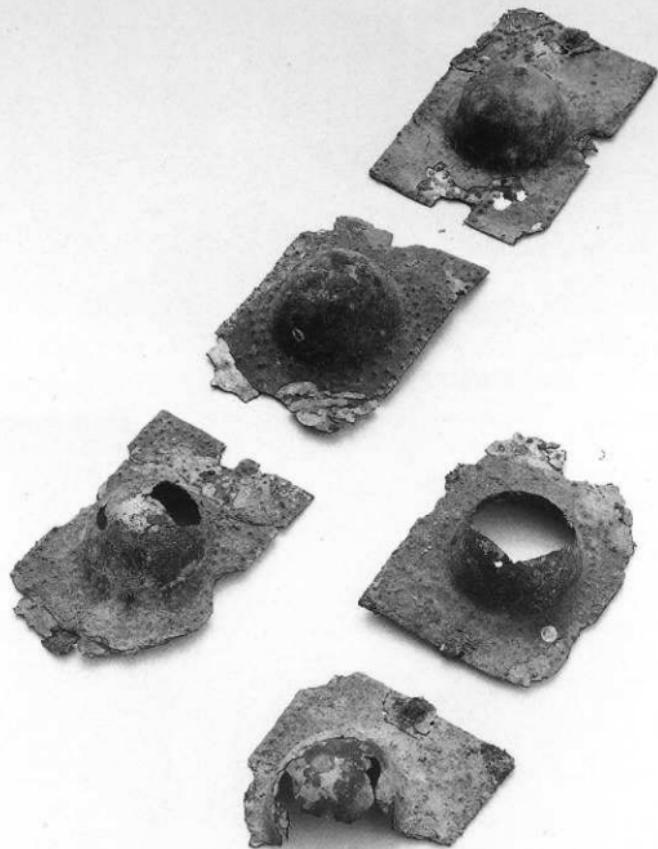
1. 家形石棺と竪穴式石室の発見状況(アタゴ写真館提供)



2. 家形石棺の人骨上半身(アタゴ写真館提供)



3. 家形石棺内部(アタゴ写真館)

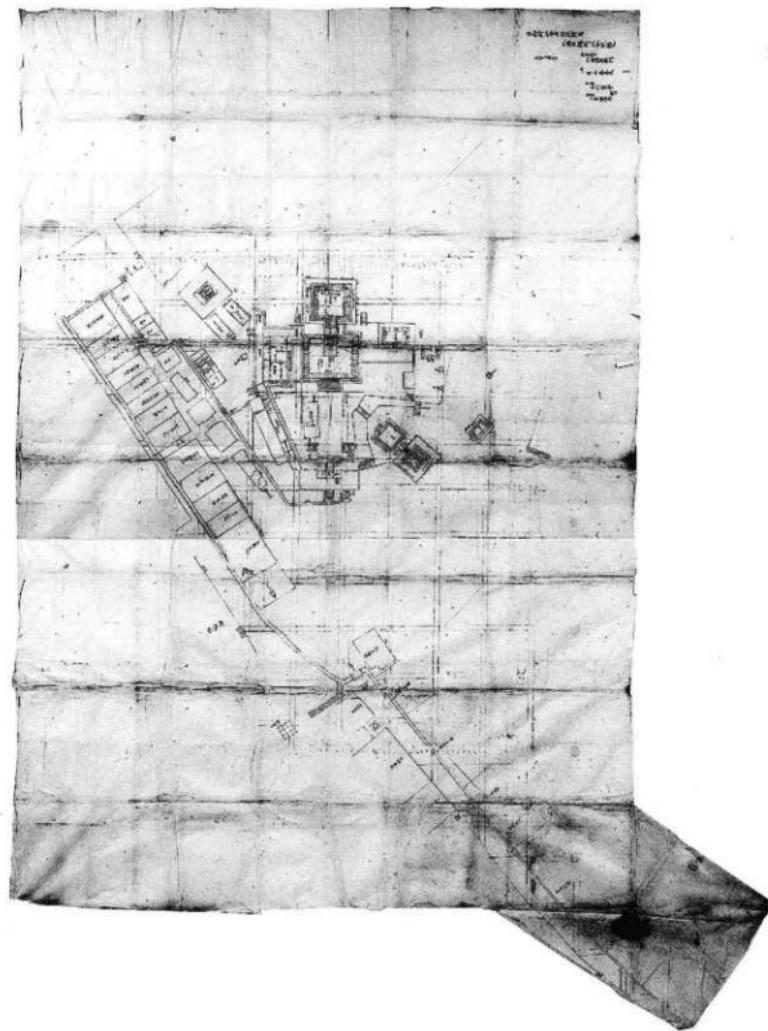


金銅製護拳帶飾金具（杉本和樹氏撮影）



f 字形鏡板付轡と剣菱形杏葉などの馬具セット (杉本和樹氏撮影)

図版 4



日御崎社分間惣地繪図 (文化 10 年, 1813)



1. 烏居近景 1



2. 烏居近景 2



3. 烏居基礎構造 1 (T-1)



4. 烏居基礎構造 2 (T-1)



5. 烏居基礎構造 3 (T-1)



6. 烏居基礎構造 4 (T-1)

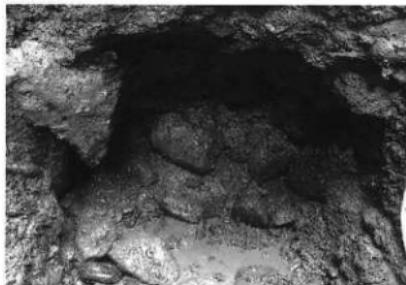


7. 烏居基礎構造 5 (T-1)



8. 烏居基礎構造 6 (T-2)

図版 6



1. 鳥居基礎構造 7 (T - 2)



2. 碓石出土状況 (F 地点)



3. 碓石刺込の出土状況 1 (F 地点)



4. 碓石刺込の出土状況 2



5. 碓石刺込検出状況と日御崎神社



6. 土層堆積状況 (F 地点)



7. 土層土層堆積状況 (A 地点)



1. 土層堆積状況(B地点)



2. 井戸検出状況1(B地点)



3. 井戸検出状況2(B地点)



4. 土層堆積状況(C地点)



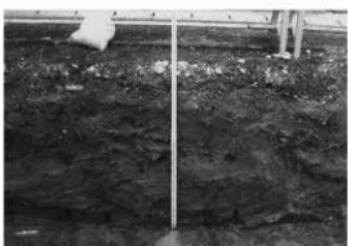
5. 土層堆積状況(D地点)



6. 土層堆積状況(E地点)



7. 土層堆積状況(F地点)

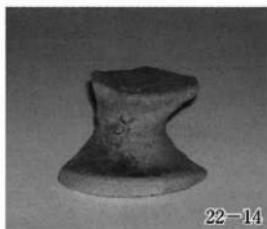


8. 土層堆積状況(G地点)

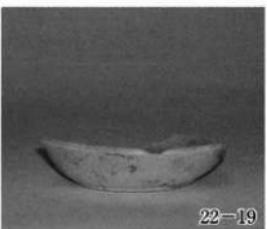
図版 8



22-1



22-14



22-19



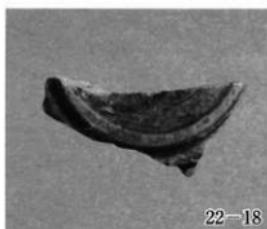
22-22



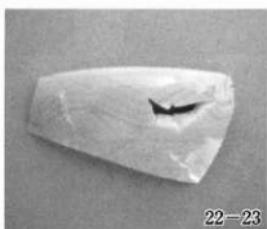
22-2



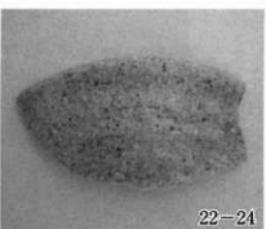
22-3



22-18



22-23



22-24

日御崎神社境内遺跡出土遺物

# 報告書抄録

ふりがな	いざもしまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ だい 17 しゅう							
書名	出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書 第17集							
副書名	上島古墳出土遺物・日御碕神社境内遺跡・鷦鷯道							
卷次	17							
シリーズ名	出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	17							
編集者名	花谷 浩、達藤正樹							
編集機関	出雲市文化観光部 文化財課							
所在地	〒693-8530 島根県出雲市今市町 109 番地 1 Tel0853-21-6893 (文化財課直通)							
発行機関	出雲市教育委員会							
所在地	〒693-8531 島根県出雲市今市町 109 番地 1 Tel0853-21-6893 (文化財課直通)							
発行年月日	平成 19 年(2007) 3 月 30 日							
所収遺跡名	所在地	コード		調査期間	北緯	東経	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上島古墳	島根県 出雲市 因幡町	3 2 2 0 3	X29 島根県遺跡地図 I (出雲・隨岐編) 2003.3	20060821 ~ 20070305	35° 25° 23°	132° 47° 58°		出雲市指定文化財 の現状調査
日御碕神社境内遺跡	島根県 出雲市 大社町	3 2 2 0 3	Z11 島根県遺跡地図 I (出雲・隨岐編) 2003.3	20061113 ~ 20070105	35° 25° 46°	132° 37° 46°	590 m <sup>2</sup>	宇毫地区漁業集落 排水整備事業
鷦鷯道	島根県 出雲市 大社町	3 2 2 0 3	489 島根県の近代化遺産 2002.3	20060621	35° 26° 32°	132° 41° 20°	173 m <sup>2</sup>	鷦鷯道災害防除 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
上島古墳	古墳	古墳	家形石棺・ 竪穴式石室	鏡、装身具、大刀 弓矢、馬具、須恵器				
日御碕神社 境内遺跡	社寺跡	中世	礎石	陶磁器 須恵器 土師器			・方形の朝込を持つ礎石 ・鳥居(重要文化財)の下部 構造を確認	
鷦鷯道	隧道	近代	隧道				壁面に機械掘による加工痕が残る	

## 出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書 第17集

上島古墳出土遺物・日御碕神社境内遺跡・鷺隧道

平成19年3月30日発行

編集 出雲市 文化観光部 文化財課  
出雲市今市町109番地1  
発行 出雲市 教育委員会  
出雲市今市町109番地1  
印刷・製本 武水印刷株式会社  
出雲市江田町205-2